

19 世紀末中国における民衆への言語教育観の変化
—盧巖章と『万国公報』上の論説、梁啓超への影響を中心に—

指導教員 西山教行 教授

平成 27 年 1 月 19 日

京都大学大学院 人間・環境学研究科

修士課程 共生人間学専攻

外国語教育論講座

赤桐 敦

論文内容の要旨

共生人間学 専攻 氏名 赤桐 敦

本研究は、民衆への言語教育を行うべきである、との言説が、19世紀に中国にもたらされた経緯と、中国の知識人によって共有された過程を解明するものである。

本研究は、以下の論証を試みる。伝統的な中国の世界観では、民衆は皇帝の財産であり、すべての民衆に教育を行うとの考えは存在しなかった。中国において、最初に近代的な教育を導入し、民衆への言語教育を開始したのは、1850年代の厦門におけるプロテスタント宣教師であった。彼らは民衆が読書できるようになれば、聖書を自分で読むことができるようになると考え、中国語研究の成果を応用し、民衆への言語教育を試みた。1895年、厦門で宣教師の影響を受けた盧戇章（1854-1928）が、上海のプロテスタント宣教師の発行する雑誌である『万国公報』上で、民衆への言語教育の必要性を訴えた。日清戦争の敗戦を乗り越え、中国の富強を実現するには、民衆への言語教育を通じて、すべての民衆が西洋文明を学ぶべきだと考えたのである。この言説は、当時中国の知識人の間で広く読まれるようになっていた『万国公報』に掲載されることにより中国全土に広がる。さらに、朝廷の改革をめざす梁啓超（1873-1929）が『時務報』上でこの言説を模倣したため、中国の改革を目指す中国人知識人の間で広く共有されることとなった。

これを論証するために、1895年前後の文献資料から言語教育に関する言説を抽出し検証する。

先行研究の検討を詳細に行い、中華民国期に「国語運動」の史観が成立し、中華人民共和国建国期の「文字改革」においても、この史観は変形させつつも、継承されたことを明らかにする。「国語運動」の史観は、中国の言語と言語教育の近代化の起源を梁の言説に求めたものの、宣教師や盧の言説を重視してこなかった。

本研究は、従来とは異なる中国近代の言語教育の起源を提示することにより、近現代の中国における言語教育観を再考することをめざしている。

目次

序	1
第一章 研究背景	3
1.1 研究対象と問題意識	3
1.1.1 研究対象	3
1.1.2 問題意識	4
1.1.3 盧贇章の重要性	6
1.2 先行研究と盧贇章の評価の変遷	8
1.2.1 中国語近代化運動の史的研究の分類	8
1.2.2 民国期における「国語運動史」	8
1.2.3 建国期における「文字改革」と「拼音運動史」	13
1.2.4 その他の関連する先行研究	17
1.3 研究目的と研究方法	19
1.3.1 研究目的	19
1.3.2 研究方法と枠組み	20
1.3.3 本研究の対象とする範囲	22
1.4 本章のまとめ	22
第二章 盧贇章の移動した領域とそれぞれの言語教育観	23
2.1 盧贇章に焦点をあてた先行研究	23
2.2 盧贇章の経歴と領域	24
2.3 盧贇章の経歴からみた領域	24
2.3.1 同安県の「農」の領域（1～19 歳）	24
2.3.2 同安県に出現した「洋」としてのキリスト教と厦門（20～24 歳）	26
2.3.3 宣教師の民衆への言語教育観と教会ローマ字（25～41 歳）	28
2.3.4 上海の宣教師とジャーナリズムの領域の誕生（42～44 歳）	30
2.3.5 ジャーナリズムと中央の官界と知識人の領域の重なり（45 歳）	34
2.4 本章のまとめ	36
第三章 最初に提示された民衆への言語教育観	38

3.1 「中国第一快切音新字原序」に関する先行研究	38
3.2 「中国第一快切音新字原序」の言説の分類	39
3.3 民衆への言語教育観の導入による中国語の変化	45
3.4 本章のまとめ	47
第四章 『万国公報』への掲載と、中国の知識人の反応と再生産	49
4.1 時系列による言語教育観に関するテキストの配置	49
4.2 1895年「変通推原説」における盧戇章の言説	51
4.2.1 1895年7月「変通推原説」	51
4.2.2 1895年7月「変通推原第二章」	53
4.2.3 1895年11月「三統変通推原説」	54
4.3 1896年『万国公報』で共有された民衆への言語教育観	56
4.3.1 蘇易（1896.1）「書同邑盧君切音字書後」	57
4.3.2 盧戇章（1896.2）「四読変通推原説」	57
4.3.3 盧戇章（1896.10）「中国切音新字説」	58
4.4 1896年『万国公報』の外に共有された民衆への言語教育観	58
4.4.1 蔡錫勇（1896.8）『伝音快字』	58
4.4.2 梁啓超（1896.9）「沈氏音書序」、沈学（1896.9）「盛世元音原序」	60
4.4.3 北京『万国公報』（1895）	65
4.5 1897年「新字」の主導権を巡る争い	69
4.6 1898年「切音新字」の上奏と変法運動の挫折	70
4.7 本章のまとめ	71
結論	73
今後の課題	75
謝辞	77
参考資料	78
盧戇章年譜	78
参考文献	80
日本語文献（アイウエオ順）	80
中国語文献（拼音順）	81
英語文献（アルファベット順）	84

序

本研究は、民衆への言語教育を行うべきである、との言説が、19世紀に中国にもたらされた経緯と、中国の知識人によって共有された過程を解明するものである。

伝統的な中国の世界観では、民衆は皇帝の財産であり、科挙を受験して官僚を目指す子供を除いて、民衆への教育を行うとの考えは存在しなかった。学問を意味する「読書」は民衆と無縁であり、広く民衆の子供が読書できるようにする言語教育の手法も、またそのための学校も存在しなかった。

中国において、民衆への言語教育を開始したのは、アヘン戦争後に開港された厦門において、布教を始めたプロテスタント宣教師であった。プロテスタント宣教師は、自分たちが中国語を学ぶための手法を用いて、民衆への言語教育を試みた。プロテスタント宣教師は、民衆が読書できるようになれば、聖書を自分で読むことができるようになると思った。

その後 1895 年、厦門でプロテスタント宣教師の影響を受けた盧戇章（1854-1928）が、上海のプロテスタント宣教師の発行する雑誌である『万国公報』上で、民衆への言語教育の必要性を訴えた。日清戦争の敗戦を乗り越え、中国の富強を実現するには、民衆への言語教育によって民衆が読書ができるようにし、民衆が西洋文明を学べるようにすべきだと主張したのである。

この言説は、当時中国の知識人の間で広く読まれていた『万国公報』（1868-1907）に掲載されることにより中国全土に広がる。さらに、梁啓超（1873-1929）が『時務報』（1896-1898）上でこの言説を模倣したため、中国の改革を目指す中国人知識人の間で広く共有される。

中国の知識人の間で共有される過程で、表音文字の導入による言文一致と、話し言葉の統一という中国語の近代な形式が模索される。それは中国の知識人の間で伝統的な「言」と「文」という形で認識され、誰がその新たな規範となる表音文字を作るのかを巡って主導権争いが生じていった。

先行研究は、中央政府や中国の知識人を主要なアクターとみなし、段階的に言語が発達してきたとの史観からアプローチしていたため、プロテスタント宣教師や盧戇章の果たした役割を重視していない。本研究は、この点を補い、中国の民衆と言語、国家の史的研究に新たな視座を提供することを目指す。

第一章では、まず研究対象と問題意識について確認する。中華民国期と中華人民共和国建国期における先行研究を詳細に検討し、民国期に「国語運動」の史観が成立し、建国期の「文字改革」においても、それを変形させつつも、継承したことを明らかにする。

第二章では、まず先行研究にもとづき盧戇章の経歴を整理する。そして、盧が移動したいくつかの社会領域で共有されていた言語教育観を検討する。厦門や上海のプロテスタント宣教師の領域と、北京や中国各地の改革を目指す中国の知識人の領域が、『万国公報』を媒介として接触していったことを明らかにする。

第三章では、盧戇章が 1892 年に出版した『一目了然初階』の言説を分析する。盧の民衆への言語教育観が、伝統的な教育観を覆す革新的な思想であったことを確認し、現代中国語の形成に与えた影響を示す。

第四章では、1895 年に『万国公報』に掲載された盧戇章の論説が、中国の知識人の間でどのように受け入れられ、再生産されたのかを解明する。先行研究は、清末に各地で起こった言語改革運動が個別に発生したと主張するが、本研究は、盧の言説を起点に連鎖的に引き起こされたと主張する。また再生産の過程で、教育制度そのものよりも、文字改革に重点が移動していったことを解明する。

第一章 研究背景

本章では、研究対象、問題意識、先行研究、研究目的、研究方法と枠組みを明らかにし、次の課題を検証する。

- 1) 中央政府と中央の知識人においては、言語が段階的に発達していくとの史観が存在していること¹。
- 2) 言語発達史観が、時代を経るにしたがって強化されたこと。
- 3) 言語発達史観によって、盧戇章の言語教育観が無視され、『万国公報』上のテキストが史料から切り落とされたこと²。
- 4) 清末の言語教育改革に関わったアクターの背景や目的、相互のつながりに着目した研究が行われてこなかったこと³。

1.1 研究対象と問題意識

1.1.1 研究対象

本研究は、1895年前後に中国で初めて行われた、言語教育政策に関する言説を研究対象とする。主な分析対象は、プロテスタント宣教師の発行する漢語雑誌『万国公報』に掲載された、盧戇章のテキストと言語教育に関連するテキストである。テキストの詳細は次の通りである。

盧戇章のテキスト：「変通推原説」⁴、「変通推原第二章」⁵、「三統変通推原説」⁶、「四読変通推原説」⁷、「中国切音新字説」⁸。

その他のテキスト：「書同邑盧君切音字書後」⁹、「書盧戇章先生中国切音新字後」¹⁰、

¹ 19世紀末に進歩主義（progressivism）が新思潮として中国に紹介され、20世紀から現代に至るまで、一般的な歴史観となった。日本語文脈では、「進歩史観」は、特定の思想を指すことがあるので、本研究では「発達史観」あるいは「言語発達史観」と表記する。

² テキストとは、「記録された言説」を指す。本研究は、現在閲覧可能な文献から、19世紀末の言語教育に関する言説を抽出するが、版によって文章の異なることがある。特に、1895年前後の文献では、意図的に書かれた時期や出版された時期が改変されていることがある。言説がどこまで遡れるのかを検討するため、「テキスト」と「言説」を分け、「テキスト」の信頼性を検討する。

³ アクターとは、「近代化を目指す行為者」を指す。行為者は、個人と団体を含む。

⁴ 盧戇章（1895.7）「変通推原説」『万国公報』第七十八冊、台北：華文書局影印本（1968）15341頁に収録

⁵ 盧戇章（1895.10）「変通推原第二章」『万国公報』第八十一冊、前掲書 15539頁

⁶ 盧戇章（1895.11）「三統変通推原説」『万国公報』第八十二冊、前掲書 15607頁

⁷ 盧戇章（1896.2）「四読変通推原説」『万国公報』第八十五冊、前掲書 15811頁

⁸ 盧戇章（1896.10）「中国切音新字説」『万国公報』第九十三冊、前掲書 16355頁

「節録致盧戇章先生第三函」¹¹、「書伝音快字後」¹²、「致沈学先生函」¹³。

これらのテキストに加えて、盧戇章の「変通推原説」の基となった『一目了然初階』(1892)の序文「中国第一快切音新字原序」の分析も行う¹⁴。

また、議論の前後関係を示すために、言語教育観に関するテキストも考察する。

1.1.2 問題意識

中国は、19世紀末から現代に至るまで、清末の壬寅学制改革（1902）、中華民国における文学革命（1910年代）、新文化運動（1910年代）国語統一運動（1920-30年代）、中華人民共和国における文字改革（1940-50年代）、普通語推進（1950年代-）、識字教育（1940年代-）と、言語教育を通じた近代化の試みを何度も繰り返してきた。

毛沢東（1893-1976）、周恩来（1898-1976）などの政治的指導者、魯迅（1881-1936）や瞿秋白（1899-1935）のような作家、胡適（1891-1962）のような教育者、錢玄同（1887-1939）のような言語学者など、そのアクターは様々で、それぞれの社会的文脈や立場、主張は異なる。だが、いずれにも「中国の近代化を実現するために、民衆への言語教育をどうすべきか」¹⁵という意識が共通している。

つまり、国家を構成すべき中国の民衆が、「一盤散沙」（ばらまかれた砂）のように国民として未成熟であること、そこで言語教育を通じて、民衆の知識と教養を高める必要があるという意識が、アクターの言説に読み取れる¹⁶。中国の伝統的教育観によれば、民衆は皇帝の財産であり、民衆は無教養のまま文人官僚により統治される存在である。国家の主体は皇帝と朝廷の官僚たちにあり、国家の強弱と民衆の教育は関連づけられていなかった

⁹ 蘇易（1896.1）「書同邑盧君切音字書後」『万国公報』第八十四冊、前掲書 15752 頁

¹⁰ 林韜存（1897.1）「書盧戇章先生中国切音新字後」『万国公報』第九十六冊、前掲書 16588 頁

¹¹ 沈学（1897.3）「節録致盧戇章先生第三函」『万国公報』第九十八冊、前掲書 16748 頁

¹² 蔡爾康（1897.4）「書伝音快字後」『万国公報』第九十九冊、前掲書 16837 頁

¹³ 林韜存（1897.5）「致沈学先生函」『万国公報』第一百冊、前掲書 16907 頁

¹⁴ 拼音文字資料叢書（1956）『一目了然初階』に収録。

¹⁵ 例えば、周恩来は、「文字改革」について次のように述べる。「六億の人民の文化のたちおくれた状態からぬけだそうという欲求をみたすため、また、社会主義の事業をより多く、よりはやく、よりよく、より経済的に発展させようという欲求をみたすため、みなさんが文字改革を積極的に支持することを希望します」（周恩来（1958）、「当面の文字改革の任務」、『中国の文字改革』29-30 頁）

¹⁶ 民衆を「一盤散沙」と見る考えが、近代以降の知識人に共有された経緯については、藤井（2008）を参照。

た。ところが近代的な教育観は、これを覆すものであった¹⁷。

1895年前後の『万国公報』上の言説には、この近代的言語教育観の原型が初めて観察される。現代中国の言語教育観を理解するために、中国で最初となる民衆への言語教育観がどのように語られ、いかに中国の知識人の間に共有されるに至ったのかを解明することは、極めて重要である。

しかし、先行研究は、この近代的言語教育思想が、いつ、どのようにもたらされたのか、との疑問に答えていない。民衆が国家の言語を学び、国語によって学校教育を受けること、教育の質が国家の富強に影響することは、現代中国ではすでに常識となっており、ことさら議論されない。

先行研究を検討すると、中国というネイションの原型が、近代以前から存在し、清末の変法運動を機に目覚め、現代に向かって段階的に発展していくという歴史観に基づいていることが読み取れる。歴史を発展させるために、民衆を教育する役目を担ったのは、中央政府と中央に近い知識人にほかならない。

この中央政府と知識人の主導する発展史観においては、プロテスタント宣教師の発行した雑誌『万国公報』や、地方の下層知識人にすぎない盧戇章の言説は重視されなかった。そのため、『万国公報』や盧戇章のテキストも忘却されてしまった。

しかし、これらの史料を時系列で再構成すると、民衆への言語教育観の転換点が、盧戇章の言説にあることは明白である。そしてこれに注目し、ジャーナリズムによって中国全土への普及を試みたのは、プロテスタント宣教師であった。中央の知識人達は影響を受け、それを模倣したにすぎない。本研究では、このプロセスを解明し、中国における言語教育史観に新たな視座を提供したい。

ヘイトスピーチや領土問題を初めとして、近年の東アジアでは、ナショナリズムによる摩擦が顕在化している。この問題の根底には、各国の国民が、国民の歴史を信じ、祖先と同じ言語共同体に属することへの誇りがある。メディアを通じて、国民の誇りが傷つけられたのを知った時、国民たちは語り合い、興奮し、行動に立ち上がる¹⁸。一方、知識人た

¹⁷ 皇土皇民思想と呼ばれる皇帝中心の世界観では、民衆は皇帝の財産であり、教育の対象とはならない。「溥天之下 莫非王土 率土之濱 莫非王臣（大空の下に王土でない土地はなく、地の果て（浜辺）まで王臣でない人間はいない）」（『詩経』小雅・北山之什）

¹⁸ マスメディアと言語、ナショナリズムの関係を、アンダーソンは印刷資本主義と呼ぶ。アンダーソン（2007）を参照。

ちが「砂」と評した 19 世紀末の中国の民衆は、文字を知ることもなく、新聞を読まず、共通の話し言葉で語り合うこともできなかった¹⁹。

中国では、2000 年以降、経済発展を背景に、教育の質の高まりやテレビ、インターネットの普及によって、普通語の使用率が急速に高まっている²⁰。地域や社会階層を越えて、共同体の出来事を共有し、普通語によって語り合う、言語共同体が形成されつつある。これは 19 世紀末以降に、知識人が理想としてきたもので、目覚めた民衆によって構成される豊かで強い国家としての中国が、100 年を経て完成しようとしている。

今後、民衆への言語教育は、言語共同体を絶対視し、そのさらなる強化へと向かうのだろうか。それとも他の言語共同体の対等な存在を認める相対的な言語共同体に向かうのだろうか。この展望をひらく上でも、中国の民衆への言語教育観の起源を解明する必要がある。

1.1.3 盧戇章の重要性

アヘン戦争（1940-1942）は、中国の伝統的な統治思想を大きく揺らがせ、1895 年の日清戦争（1894-95）の敗戦はそれを決定的にした。西洋列強ではなく、文化的にも軍事的にも劣位だと考えられていた日本に対する敗北が、知識人階層に危機感を抱かせた。そして、康有為（1858-1927）、梁啓超らの戊戌の変法（1898）に始まる、近代へのパラダイムシフトを発生させたのである²¹。

しかし、1895 年の敗戦の危機感は、なぜ中国にパラダイムシフトを引き起したのだろうか。アヘン戦争から日清戦争にいたるまで、清朝は、清仏戦争（1884-85）、太平天国の乱（1850-64）など対外戦争や内乱に敗北し続ける。また、外交交渉においても、ボーリング条約（1855）や琉球処分（1872-79）などにより、朝貢国を次々と失い、危機感は何度も高まった。

これまで劣位だとみなしてきた民族によって、皇帝の軍隊が敗北することは、清朝に限らず、歴代王朝の歴史上、何度も繰り返されてきた。しかし、軍事的敗北が王朝を衰退させることはあっても、伝統的世界観や統治システムそのものを覆す事はなかった。

危機感を抱くことと、伝統社会を覆すパラダイムシフトの発生の間には、大きな飛躍が

¹⁹ 声と文字と共同体については、オング（1991）を参照。

²⁰ 普通語の使用場面の増加については、普通話普及状況調査項目組（2011）を参照。

²¹ 中華人民共和国建国期の中国では、日清戦争の敗戦に端を発する変法運動を改良主義的変革運動として、あまり高く評価しない傾向もあった。

ある。この間隙を埋めるため、なんらかの媒介が作用したのではないか。

この問いを解明するにあたり、本研究は、盧戇章に焦点を当てる。盧は、1892年の『一目了然初階』で中国人として初めて、民衆への言語教育と国家の富強を結びつけた。

盧は著書の序文「中国第一快切音新字原序」において、西欧列強と日本では、民衆が読み書きのできることに言及する。列強が富強を実現したのは、民衆への学校教育と教育を支える言語教育に由来するとし、中国もそれに習うべきだと主張する。しかし、中国語は、漢字の種類が多すぎることに、画数が多すぎることに、言文が一致しないことから、教育言語として不適當である。そして、言文一致の教育言語として中国語を再構成するために、盧は表音文字である「切音字」を提案する。

盧の提唱した言語教育観、すなわち国家の富強と民衆への言語教育という主張は、1895年4月に日清戦争の講和条約が締結された直後、同年7月「変通推原説」として『万国公報』に掲載され、中国全土に知られることになる。

『万国公報』は、日清戦争を時々刻々と伝えることにより、中国の知識人に多くの読者を獲得していた。その中で「変通推原説」は大きな反響を呼び、朝廷と知識階層の中心人物に模倣者を生み出した。その中には、日清戦争後の変法運動の首魁の一人、梁啓超がいる。梁啓超は、翌年8月、自らが創刊に関わり主筆も務めた雑誌『時務報』(1896-1898)に掲載した「沈氏音書序」の中で、「国が強くなるためには、民が智を持たねばならず、智を持つためには、天下の人々が読書し、字を識らなければならない。」と主張する。

この論説は、沈学(1871-1900)の表音文字案である『盛世元音』に対する推薦文として掲載されたが、そこで語られる民衆への言語教育観は、盧(1895.7)「変通推原説」に酷似している²²。梁の『盛世元音』の推薦文は、『申報』(1872-1949)などの他の新聞にも転載されており、梁が民衆への言語教育に強い関心を持ち始めたことが伺える。

梁の他にも、1895年以降、清朝の洋務局局員で米国との交渉にもあたっていた官吏の蔡錫勇(?-1897)も、表音文字案『伝音快字』(1896)を発表する。その協力者、力捷三(生没年不詳)も1896年に『閩腔快字』を出版する。また、1898年には、馬建忠(1845-1900)による中国人初の文法書『馬氏文通』が出版され、無錫では、民衆のための話し言葉(白話)による新聞『無錫白話報』(1898.5-9)が発行された。

このいずれも、西欧列強と日本の民衆が高い教育を受けていること、中国の漢字は学習

²² 沈学(1896)『盛世元音』、拼音文字史料叢書(1956)『盛世元音』北京：文字改革社4頁に収録。

困難で、言文一致でないために、漢字が民衆の教育を阻害していること、民衆への教育が中国の富強につながることに言及している。このような知識人の危機感に基づく言語教育観は、変法運動の頓挫を経ても、拡大し続け、1900年前後には、5種類以上の白話新聞、十数種類の表音文字案が作られ、清朝崩壊までに32種類の表音文字案が作られた。

中華民国成立後には、知識人階層にとって、民衆への言語教育問題はすでに大前提になっており、表音文字案の選択、話し言葉の標準化、教材としての児童向け文学作品、学校制度などの実施方法へと議論は移っていく。

1.2 先行研究と盧戇章の評価の変遷

1.2.1 中国語近代化運動の史的研究の分類

清末の言語教育の変革に関する先行研究は、年代や論者によって主張が異なる。そこで本研究では、時代別に清末（1892-1911）、民国期（1912-1948）、建国期（1949- ）の三つの時代に区分する。

時代別に区分するもう一つの根拠は、史的研究が時代の中で共有される歴史観と不可分の関係にあるからである。統治主体が交代し時代が改まると、それ以前の統治主体の前時代性を強調し「現代」の正統性を示すために、歴史の再編が行われる。言語教育の史的研究でも同じような再編が行われる。

民国期には、清末の近代化運動の前時代性が強調され、建国期には、清末と民国期の前時代性が強調された。後世からの再評価は国家の歴史観と不可分であり、中央政府と知識人を中心に主張された段階的な言語教育史観を乗り越えるものではない。

1.2.2 民国期における「国語運動史」

民国期における近代的な言語教育の史的研究には、黎錦熙（1934）『国語運動史綱』、羅常培（1934）『国音字母演進史』、陳望道（1939）『中国拼音文字的演進』などがある。なかでも、黎の『国語運動史綱』は、その書名の示すように、言語と言語による近代化を「国語運動」とし、以後の研究の方向性を決定づけている。

黎錦熙（1890-1978）は民国期の国語運動の中心人物の一人である。1916年から「中華民国国語研究会」を結成し、中華民国教育部に働きかけ、注音字母や白話文の採用を促した。1920年からは北京高等師範学校国文系の教授となり、北京大学などでも国文を講じた。毛沢東が1913年に湖南省立第四師範学校に入学した際の教師であり、当時の毛は、黎を師

と仰ぎ、書簡を交わしている。建国期に中国文字改革協会を組織された際も、黎錦熙は委員として、中心的役割を果たした。

黎は、『国語運動史綱』の序文で、まず中国の「国難」と上海の商務印書館について述べる。『国語運動史綱』は、『最近三十五年之中国教育』に寄稿した「三十五年来の国語運動」がもととなった。『最近三十五年之中国教育』は、1931年上海の商務印書館から出版された。同じ年に「九・一八」（満州事変）が起こり、「一・二八」（第一次上海事変）により上海の商務印書館は日本軍に焼かれてしまう。手元に残った『最近三十五年之中国教育』は、上海の商務印書館の記念になってしまったと黎は訴える²³。

そして、この商務印書館が開設された1897年が、中国の「国語運動」が開始された年であると黎は主張する。この年は湖南南学会と時務学堂の開設された年であり、その前年に上海『時務報』が創刊したことから、1897年から運動が開始されたと主張するのである。

続いて黎は、『時務報』に掲載された梁啓超の「沈氏音書序」を引用する。梁のこの「一吹」（声を大にして宣伝する事）に加えて、康有為の変法を訴える皇帝への上書によって、「（中国の）全てが古きを改めて、新しいものを打ち立てる」ようになったと、黎は分析する²⁴。

黎は、1930年までの30年数年にわたる国語運動史を五期に分け、1900年以前を第一期「切音運動時期」とした。黎は、この時期について次のように述べる。

「国語運動の第一期、これらの運動家たちの目的は「言文一致」のみで、「国語統一」にはまだ注意がむけられていなかった。国語統一というスローガンは第二期に入って叫ばれるようになった。言文一致には、ある種の「切音」の道具が必要であり、煩雑で難しい漢字にとって代わらなければならない。しかし文体の改変には注意が払われておらず、文言を白話に変える事は、第三期になって提唱されたものである。よって、私たちはこの第一期を「切音運動時期」と呼ぶ。」²⁵

そして、このような運動の動機が、日清戦争の敗戦のためであると説く。

²³ 黎 (1934) 1 頁

²⁴ 同 85 頁

²⁵ 同 91 頁

「切音運動の動機は、彼らが甲午（1894）の大敗戦を目撃した事にある。愛国の良心を呼び起こし、原因が追求された。日本の民智が早く開けているのは、人々が文字を知り読書をするからで、51の仮名にその理由があると考えられるようになった。一方、何人かは西洋に行って、彼らの文字教育がやさしく、普及していることに敬服し、さらに速記術の速さに驚き、切音新字が創造された。」²⁶

盧について、黎は、「盧戇章はこの時代にあつて、切音字運動に従事した最初の人物であつたと言えよう」と評価し、盧の経歴、盧の表音文字案である「切字新字」の解説、朝廷への上奏、上奏の失敗、朝廷から評価など6頁に渡って解説する。

このような黎の史観は、以下の点で、後の研究に強い影響を与え、基本的な枠組みを規定する。

- 1) 「国語運動史」という名称
- 2) 国語運動の起点
- 3) 国語運動の動機
- 4) 国語運動における清末の運動の役割と「切音運動」
- 5) 盧戇章の評価
- 6) 史料の取捨

1) 「国語運動史」という名称

清末の改革から民国期までの国語運動を「国語運動史」として総括することにより、中国に国語運動史観が形成された。それによれば、中央政府によって規定された言文一致の国語、国語による民衆の教育、段階的に発達していく国語が前提となる。清末の改革は国語運動の萌芽として位置づけられる。このような史観は、名称を変えながらも建国期、現代へと受け継がれている。

国語について黎は、国語イコール大衆語であると定義する²⁷。民衆が国語を話すことが理想であり、「言文一致」と「国語統一」は国語運動の発展度を評価する基準とされる。

「国語」の名称の由来について、黎は言及しない。しかし国語の表音文字である注音符

²⁶ 同頁

²⁷ 「国語」、「白話」、「大衆語」は「同実異名」だとする。(同 19 頁)

号は、日本に由来すると説明する²⁸。

2) 国語運動の起点

黎は、「国語運動」の起点を、1896年の梁の「沈氏音書序」に求めた。梁らの変法運動によって、民衆への言語教育を目指す中国の国語運動が始まったとするのである。

梁のジャーナリズムを通じた「一吹」は全国に広まり、開明的な知識人がそれに呼応した。運動の主体は、あくまで中央の知識人である。開明的な知識人は、民衆を啓蒙しようとするが、頑固な中央政府は聞き入れることはない。この清末の国語運動と知識人の関係には、1920年代～30年代の黎自身の立場が投影されている。

3) 国語運動の動機

黎は、日清戦争の敗戦が、愛国心を呼びさまし、清末の国語運動を生み出したと解釈する。この解釈を成立させるには、国語運動が1895年の敗戦以降に始まらなければならない。愛国の主体は中国人自身であり、知的な英雄であることが望ましい。

黎は、国語運動史を、満州事変から上海事変へと拡大する日本の侵略に対する危機感の中で書いた。国語運動史の起点と動機が日清戦争の敗戦の時期に置かれたことは、偶然とは言えない。国語の権威を高め、国語への愛国心と国語による愛国心を促すためにも、国語運動のルーツには、民衆を糾合できる知的な英雄、すなわち梁啓超が置かれなければならない。

梁啓超は、16歳で中央官界への登竜門である「挙人」となり、清朝崩壊後も、中華民国の知識階層の巨人として内外の高い評価を得ていた。その一方で、盧は、1895年には既に40歳をこえながらも、「文童」に過ぎなかった²⁹。

4) 国語運動における清末の運動の役割と「切音運動」

黎の国語運動史には、発達史観が観察される。国語運動が中央の知識人から段階的に発達したように描くため、1895年前後に中国各地で起こった改革を求める論説を、限定的で未成熟なものとして位置づけた。

²⁸ 注音符号で教育を行うことについて、「これは全く「日本に学べ」である。彼の「船堅砲利」を学ぶのと全く同じである。」と黎は述べる（同 33 頁）

²⁹ 盧戇章は、科挙の最初の試験である県試に合格していたが、次の府試に落第したため、公式には、最下層の「文童」（学校試の受験生）とされた。

清末の運動は、表音文字の導入から民衆への教育全体の改革を目指すものだったが、「切音運動」との名称によって文字の改革を目指す運動に限定され、背景にあった言語教育観と切り離されてしまう。そして、段階的に発達するなかで、最も未成熟な段階だとされた。

黎は、『国語運動史綱』の「切音運動」で、盧の『一目了然初階』に言及する。序文「中国第一快切音新字原序」を引用し、「国語統一」に彼（盧）は注意している」としていながらも、そのことに深く言及しない³⁰。その一方で、「国語統一」のスローガンが叫ばれるのは第二期になってからだ」と「切音運動」を規定し、国語運動史が段階的に発達してきたような編集を加えている³¹。

1895年前後の論説は、文字だけでなく、科目教育、学校制度、図書館、印刷、出版を含む言語教育を通じた社会変革を目指すものだった。黎ほどの学者が、この点を失念することは考えられない。しかし、「国語運動史」の中で、この論説はとりあげられなかった。

1930年代の近代的言語学と音声学を学んだ国語学者と言語学者たちは、「切音運動」で出現したさまざまな「切音字案」を分類し、評価した。「近代科学」から見れば、これらの「切音字案」は不完全な表音文字であった。このことは、清末の「切音運動」が不完全である論拠とされた。

5) 盧戇章の評価

日清戦争の敗戦を起点と動機とする国語運動史の枠組みでは、敗戦の3年前にあたる1892年に発行されていた『一目了然初階』を説明することはできない。しかも、その序文で述べられた内容は、「国語運動」の発達史を超えるものだった。

黎は、「盧戇章はこの時代にあって、切字運動に従事した最初の人物であったと言えよう」³²と「切字運動」の枠組みから判断を下す。この評価により、盧の切音文字が生まれた背景や、盧の言語教育観は見落としてしまう。

黎は、『国語運動史』の中で、盧の序文を数行に渡って引用するが、その内容をほとんど評価することはない。「切音文字」の紹介に頁数を割いた後、後に行われた訳学館による批判を引用し、盧の切音字が音韻学的にいかにも不正確だったのかを印象づけている。

³⁰ 同 92 頁

³¹ 同 91 頁

³² 同頁

6) 史料の取捨

黎は、盧に関する史料を『一目了然初階』しか使用していない。梁の論説は、『時務報』から引用されているのに対し、プロテスタント宣教師の雑誌『万国公報』の論説は参照されていない。これにより、後の研究でも『万国公報』が史料として参照されることはなくなる。

以上のように、黎の国語運動史は、中国の国語運動が、あたかも梁らの中央の知識人から始まったかのように編纂している。第一期から五期に向けて段階的に発達する国語運動のなかで、切音運動は国語運動の萌芽として位置付けられたのである。

1.2.3 建国期における「文字改革」と「拼音運動史」

1949年の中華人民共和国成立後、中華民国の国語運動は前時代のものとして再編される。

抗日戦争の勝利を強調し、台湾に残る中華民国に対抗するため、「国語」という概念は用いられなくなった。中華人民共和国は「人民」による国家であり、「国民」という概念が否定されたからである。「国語」に代わって、漢字表音のための「拼音」と、画数の少ない「簡体字」、共通の話し言葉である「普通語」による「文字改革」が推進される。

この建国期の「文字改革」の概念が、文字通りの文字改革ではなく、共通語の普及を含んでいることに留意すべきである³³。1950年、中央人民政府政務院文化教育局に組織された「中国文字改革研究委員会」には、黎錦熙をはじめ、民国期の国語運動に関わった委員が参画している³⁴。用語や概念は変形しても、民衆のための言文一致と言語統一という言語教育観は、思想的にも人的にも建国期に受け継がれた。

「中国文字改革研究委員会」は、1954年「中国文字改革委員会」として改組される。「文字改革運動」は、中央人民政府による全国的な政治運動として推進された。その中で「国語運動史」を踏襲しながら、「文字改革」の史的研究も進められる。そこで、以下、委員会委員を務めた倪海曙(1918-88)による「文字改革」の史的研究を検討する。

倪は『清末漢語拼音運動編年史』(1959)で、中国語の拼音の歴史は、「反切法」から数えれば、1700年以上の歴史があるとする。この歴史の中で、四つの系統が出現したが、1850年の教会ローマ字の系統と1891年の近代民族漢語拼音運動の系統が、「文字改革」につな

³³ 「当面の文字改革の任務は、漢字の簡略化、共通語の普及、漢語表音案の制定と実施です」(周恩来(1958)、「当面の文字改革の任務」、『中国の文字改革』5頁)

³⁴ 松岡(2010)によれば、黎錦熙が、呉玉章(1878-1966)に文字改革を訴え、呉が劉少奇(1898-1969、建国当時中央人民政府副主席)と毛沢東に手紙を書いた。

がると説く。

「この二つの系統の漢語拼音は、いずれも文字改革の性質を持つ。特に近代民族漢語拼音運動は、清末に始まってから、「せき止めても流れ、禁止しても行われる」ように、いったん始まったら止める事ができず、60 余年にわたって、旧民主主義と新民主主義の革命が結合し、拼音を手段とする、言文一致、統一言語、富強国家、危機存亡の救済を目的とする漢字改革運動を形成した」³⁵

この言文一致、統一言語、富強国家、危機存亡の救済からなる漢字改革の目的は、民国期の「国語運動」とほぼ重なる。そして、倪は次のように述べ、拼音の歴史の長さ、文字改革運動が段階的に発展してきたことを強調する。

「この運動は四段階に区別できる。清末の漢語拼音運動（またの名を「切音字運動」）は、第一段階であり、辛亥革命後の「注音字母運動」が第二段階、五四運動後の「国語ローマ運動」は第三段階であり、第二次国内革命戦争時期に始まった「ラテン化新文字運動」が第四段階である。（中略）今日の漢語拼音案は、千七、八百年におよぶ漢語拼音の歴史的結晶であり、同時に六十余年にわたる近代民族漢語拼音方案の総括であると言えよう」³⁶

倪は先行研究として、黎錦熙（1934）『国語運動史綱』、羅常培（1934）『国音字母演進史』、陳望道（1939）『中国拼音文字的演進』を挙げている。「国語運動」の史観は、「文字改革運動」に引き継がれているのだ。

倪は、さらに研究者に史料を提供するために、3つの出版事業を実現した。第一は、『拼音文字史料叢書』（清末部分 22 冊、32 種、内 7 種は新たに発見された史料）を文字改革出版社から出版することであり、第二に、『清末文字改革文集』（序文の抜粋、論文、上奏文、提案、書信、演説等）を編集出版することであり、第三にこの編年史を出版することである。

倪の整理した一次史料は、今日の研究者にとって最も重要な史料となっている。民国期から建国期にかけて、倪が収集・出版しなければ、文化大革命などで散逸してしまってい

³⁵ 倪（1959）1 頁

³⁶ 同頁

た可能性は高い。

しかし、『拼音文字史料叢書』、『清末文字改革文集』には、『一目了然初階』、『北京切音教科書』、『中国字母北京切音合訂』などの盧戇章の史料、沈学の「盛世元音」、梁啓超の「沈氏音書序」などが収録されたものの、『万国公報』上の論説は収録されなかった。倪も、黎と同じく『万国公報』上の論説を無視したのである。

倪は、黎の史観を引き継ぎ、清末の言語教育を拼音運動（切音字運動）と定義し、背景や言語教育観を考慮せず、史料としての『万国公報』を無視した。倪はこのようにして、建国期の研究を方向づけた。

倪と黎は、拼音運動（切音字運動）が 1891 年に始まるとする点で見解の一致を見ていない。黎は、1930 年代に日本軍による国難が迫るなかで『国語運動史綱』を著し、国語運動の起点を日清戦争の敗北と戊戌変法に定めた。しかし、日本に勝利し建国を果たした共産党の主導する中華人民共和国において、戊戌変法は不完全な改良主義運動とみなされた。倪は変法運動について次のように述べる。

「彼らは西洋を師とし、資本主義を発展させ、富強を求め、帝国主義の侵略に抵抗する旧民主主義革命の要求を持っていた。しかし、彼らは軟弱すぎた。ただ「変通」を求め、真の革命を求めなかった。日本の明治維新をまねて、彼ら地主階級の根本的権利を基礎として、資本主義発展の条件を求めた。これが改良主義の道路である。」³⁷

倪は、黎の重視した梁啓超による「沈氏音書序」を他の文字改革の言説と同列に扱い、特別視しない。

倪が、運動の起点を日清戦争より前の 1891 年とするのは、1891 年に宋恕（1862-1910）が『六齋卑議』を「成稿」（書きあげた）ことによる。確かに、『六齋卑議』には、以下のような記述がある。

「白人種の国の男女の識字者は多く、多い国は 10 人に 9 人、少ない国でも 10 人中 2 人いる。黄色人種の民で識字者は、日本が最も多い。インドは、イギリスの平民と女子の識字の禁を緩めたため、今は識字者が 100 人中 4 人になっている。中国は秦の時代より前に学校が最も盛んで、男女で書を知らない者はなかったが、秦の時代より脅かされ、愚かにな

³⁷ 同 14 頁

り、今、識字者は、男で 100 人中 1 人、女は万に 1 人しかいない。」³⁸

『六齋卑議』の執筆は 1891 年であるが、1897 年に出版された。巻頭で、1891 年に書き上げたが、時勢が許さなかったので公表しなかったと、思わせぶりに書かれている。このように完成原稿を公表以前の時間に遡り、誰よりも早く原稿を書き上げていたことを暗示するとの表現は、同時代の梁啓超や盧戇章の言説にも認められる³⁹。1895 年前後、最初に「新字」を提唱した人物をめぐって、両者は互いに意識しあっていたことが伺える。

倪は、盧戇章の『一目了然初階』に対しては、黎と同じく「清末の最初の切音字案と最初の切音字本」との評価を下しながら、その背景と言語教育観について高い評価を与えることはない。『一目了然初階』の序文「中国第一快切音新字原序」について、倪は次のように分析する。

「彼の目的は何か。それは「富強」である。富強になるためには科学の提唱が必要であり、科学の提唱には教育の普及が必要であり、漢語拼音と教育の普及が最も有効な方法であると考へた。西洋各国と日本の例を挙げながら、拼音文字の有効さを証明した。」⁴⁰

倪は、このように一見、盧のテキストを正確に分析している。しかし、「ここにまさに盛り上がりつつあった改良主義思潮が反映されている」と断言する。盧の称する「富強」が、馮桂芬（1809-1874）の「中国の五倫五常の名教を根本とし、諸国の富強の術を補助とせよ」⁴¹と同じであるというのである。

『一目了然初階』の挿絵に書かれた「思入風雲変態中（時勢の移り変わりに考え入る）」という一文は、時代に遅れまいとする当時の知識人達の心情を投影している、と倪は主張する。

盧の「新字」について倪は、当時厦門で普及していた教会ローマ字をもとに、伝統的な

³⁸ 宋恕（1897）『六齋卑議』「変通篇開化章第四」

³⁹ 「5 年前に書を成し、名を『盛世元音』という」（梁啓超「沈氏音書序」）、「他の仕事を一切断り、朝に夜に、昼に夜に、十数年に渡り、文字の作成を考え研究し続けた」（盧戇章『一目了然初階』）

⁴⁰ 同 22 頁

⁴¹ 1860-1880 年代の近代化運動は、洋務運動とされる。中国の政体や社会制度をそのままに（中体）、西洋の機械技術のみを導入（西用）しようとした点で、限界があった。

反切法を継承するものである、と明言する⁴²。そしてまた「ここにも中国の学問を体とし、西洋の学問を用とする思想」が読みとれると主張するのである。

倪は、盧を、建国期に民衆の敵とされた「時代に遅れまいとする知識分子」と位置づける。盧の文字案は、洋務運動の「中体西用」と同じく、教会ローマ字の外形をまねた表面上の変革を目指すものであり、西洋の精神を学び根本的に変革するものではない、と主張した。

倪は、この根拠を明確に示していない。倪は、黎の作り上げた中央の知識人による国語運動、と言う史観を引き継ぎ、そのうえで「新たな社会秩序の建設」と言う建国期のイデオロギーによって、盧戇章の「限界」を断ずる。

倪は、「文字改革」の史料を広く蒐集し、「文字改革」史観によって、これらを分類・出版し、「文字改革」のイデオロギーを強化しようとした。しかし、この試みによって、建国期にも『万国公報』は、史料から抜け落ちてしまうのである。

倪の史観は、周有光（1961）ら他の文字改革の中心人物たちにも共有された。その後文化大革命を経て、現代の国家語言文字工作委员会に踏襲されている⁴³。

1.2.4 その他の関連する先行研究

清末から民国期、建国期を経て中国語の変化は海外の研究者の関心を引いた。1945年以前、西洋のプロテスタント宣教師や日本の知識人は、研究者であると同時に、アクターとしても中国語の近代化に関わっている。1945年以前のもものは今後の研究対象とし、ここでは戦後の先行研究を中心に検討する。

1) 民国期から建国期の中国に滞在した経験を持つ研究者の研究

1950～80年代の研究者は、戦前戦後の中国語教育の変化を目の当たりにしており、中国の知識人とも深いつながりを持っていた。ここでは、倉石武四郎（1897-1975）、John De Francis（1911-2009）、実藤恵秀（1896-1985）、大原信一（1916-2003）らの先行研究を検証する。

倉石は、戦後の日本における中国語教育の草分け的存在である。建国期の文字改革に連

⁴² 同 24 頁

⁴³ 文字改革委員会は、1985年国家語言文字工作委员会に改組された。職責は、国家の言語文字工作の方針を定め、言語文字工作の中長期計画を策定し、漢語と少数民族言語文字の規範と標準を制定し、監督検査を調整し、普通語工作を推し広げることを指導すること。

動した中国語教育を行い、その背景を歴史的に記述している。『支那語教育の理論と実際』(1941)、『漢字の運命』(1952)、『ラテン化新文字による中国語初級教本』(1953)などを刊行した。

De Francis も、早期に中国語教育の変化とその背景にある思想に着目した。*Nationalism and Language Reform In China* (1950) では、プロテスタント宣教師の言語研究の役割を重要視している点で、他の研究と一線を画している。

実藤は、『中国人日本留学史』(1960) などの日中間の知識人の交流史の研究で知られている。

大原は、90年代の『近代中国のことばと文字』(1994) や『中国の識字運動』(1997) などを著しており、中国語の近代化を系統的にまとめている。

2) 「漢字文化圏」に関する研究

「漢字文化圏」に関する研究は、中国と、近代以前に漢字文化と中国の文明を受容した朝鮮、日本、ベトナムなどを研究対象とする。近代に際し、これらの国が西洋文明をどのように受容し、ことばと権力をどのように変質させたかを研究するもので、村田 (2005) が代表的な研究になっている。

19 世紀における「漢字文化圏」の語彙と文法の変化については、沈 (2008)、沈・内田 (2010) が詳しい。

3) 台湾における「国語運動」の研究

中国共産党の支配権の及ばない台湾では、現在でも黎の「国語運動史」の史観を引き継いだ研究が進められている。

王 (1982) は、『万国公報』上の言説を、「国語運動」の歴史の中で紹介している稀有な研究である。しかし、その背景のつながりにまでは言及していない。

黄 (2005) は、『万国公報』上の言説を時系列で整理し、「新字」を巡る争いを描き出し、「新字」と教会ローマ字との関係にも言及しており、本研究に大きな示唆を与えた。しかし、アクターの背景や思想の検討については研究に限界があった。

4) プロテスタント宣教師と文字改革に関する研究

De Francis の研究に連なり、プロテスタント宣教師と中国の文字改革を関連づけた研究

には、蒲（2004、2009）の研究があり、中国のプロテスタント宣教師のための英字新聞 *The Chinese Recorder* に掲載されたプロテスタント宣教師の言語教育観を検証しており、本研究もこれを参考にした。しかしながら蒲は、盧戇章と『万国公報』に注意を向けていない。

5) 「文字改革」に関する研究と近年の中国の研究の動向

「文字改革」に関する研究と史観は、現代に至るまで主流を占めており、広く共有されている⁴⁴。

藤井（宮西）久美子（2003）は、「文字改革」を起点としながら、清末や民国に出現した様々な言語教育思想に言及し、プロテスタント宣教師の中国語研究や台湾の言語政策にまで広く網羅している。

中国国内でも、近年、李宇明（2003、2005）や王東杰（2009、2010）、時（2013）のような新たな潮流も生まれてきている。

李は、清末の「切音字」が、文字改革だけを目指したものではない、として新たな視点での理解を試みている。

王も、De Francis（1950）、村田（2005）、王（1982）の研究に基づき、清末の「切音字」の言語教育思想に言及し、表音文字による言文一致を通じて、声による中国統一を目指したものだとして主張している。

時も同様の観点から、アンダーソンの「想像の共同体」を援用し、盧戇章が言語共同体としての中国の言語統一を図ったとする。

これらの新たな研究は、「文字改革」の史観を乗り越えようとする意味で高く評価される。しかし、プロテスタント宣教師関連の史料の検討が不十分であり、発達史観を払しょくできていない。「文字改革」の史観を否定しても、発達史観によって言語共同体の歴史が新たに構築される危惧がある。

1.3 研究目的と研究方法

1.3.1 研究目的

本研究の目的は、以下の事項を論証することにある。

1) 現在に至る中国の民衆への言語教育観が、清末の『万国公報』における論説に由来す

⁴⁴ 例えば、国家語言文字工作委员会の運営するサイト『中国語言文字網』に掲載されている「語文博物館」(<http://www.china-language.gov.cn/57/index.htm> 2015年1月12日閲覧)

ること。

2) 議論は盧戇章の「変通推原説」によって始まったこと。

3) 盧戇章の言語教育観は、文字改革に留まるものではなかったこと。

1.3.2 研究方法と枠組み

本研究では、民衆への言語教育という観念が、中国にどのようなもたらされ、中国の知識人階層に共有されるに至ったのかを研究対象とし、文献研究からこれを解明する。

言語教育観とは、言語教育に対する見方を指す。現代では、ほとんどの国で、6歳前後の子供が言語教育を受けることは当然だと考えられている。国語や公用語による学校教育制度が存在し、家族や共同体も教育を受けることが当然だと考える。子供自身も成長すればそう考えるようになる。

しかし、近代以前の東アジアをみれば、このような現代の常識は、19世紀に西洋から移入された一つのイデオロギーに過ぎないことがわかる。19世紀以前には、多くの国で子供は家事や家業における労働力と考えられていた。親が書記言語能力を有する一部の階層である場合のみ、子供の言語教育を自明と考えていたにすぎない⁴⁵。

社会心理学者の Moscovici (1925-2014) は、人間による社会認知のあり方を「社会的表象」(Social representations) と呼んだ。人間は、客体としての世界を、ある種の認知方法によってしか理解できない。Moscovici は、黒人の作家 Ellison の文章を引用して、アメリカでは黒人が透明人間のように人間の目には映らず、認知されていなかった事実を示し、「年齢や人種が違えば、文字通り「目の前」に立っている人でさえ、まるで視界が曇っているかのように、見えなくなってしまうことがある」と述べる⁴⁶。19世紀以前の中国人にとって、書記言語能力は、民衆と士大夫を分ける重要な指標であった。農、工、商のすべてに言語教育を行う、との観念は存在しなかった。科挙を受験する一部の子供を除いて、民衆の子供は言語教育の対象として「見えていなかった」のである。このような視座は、21世紀の中国人には、奇異に聞える。学校教育というイデオロギーの移入から1世紀を経て、民衆に言語教育を行うことが慣習となり、規範化しているからである。

19世紀末の中国には、農村、プロテスタント宣教師、ジャーナリズムなど、異なる言語

⁴⁵ 江戸時代の日本では、庶民の子供は「手習い」を通じて言語教育を受けていた。日本の「手習い」は、近代の言語教育の下地になっており、日本の近代化を早める要因となった。

⁴⁶ Moscovici(2000)八ッ塚一郎訳、19頁

教育観を持つ社会領域がいくつか存在した。どのような集団を領域とみなすかは主観的であるため、本稿では盧巖章から見た領域を設定する。盧が1898年までに接触したであろう領域は、以下の通りである。

- 1) 同安県の「農」の領域
- 2) 同安県に出現した「洋」の領域
- 3) 廈門のプロテスタント宣教師の領域
- 4) 上海のプロテスタント宣教師とジャーナリズムの領域
- 5) 朝廷と中央の知識人の領域

盧は、福建省同安県の農村に生まれ、キリスト教に触れて、シンガポールに向かう。その後、帰国し、廈門のプロテスタント宣教師のもとで働く。1895年には、上海の『万国公報』に論説が掲載され、北京の知識人から注目されるようになった。盧は、農村や植民地、プロテスタント宣教師のコミュニティなど、価値観が異なるさまざまな領域を移動することにより、自分自身の言語教育観を生み出し、上海や北京の知識人の領域に影響を与えた。

社会的表象のもう一つの特徴は、それが持続しない点にある。天動説から地動説のように、理解を支える観念が、突如として幻想に変わることがある⁴⁷。伝統的な言語教育観を持っていた中国の知識人たちは、1895年を境に、民衆への言語教育を訴え始めていった。

それぞれの社会領域で、どのような言語教育観が存在したのかを知るために、一次史料を文献資料として検討する。著作の序文や新聞や雑誌の論説、日記などから、言語教育に関する言説を抽出する。書かれた文献資料としての言説を「テキスト」と呼び、現在閲覧可能なテキストがいつ出版・公表されたのかを検討する。そして領域内のアクターが、どのテキストをいつ読み、どのように言語教育観を変化させたのかを解明する。

先行研究で検討したように「国語」や「文字改革」という用語そのものに、発達史観が内包されている。また、プロテスタント宣教師は当初、外国語として自身が学ぶために中国語を研究したが、その成果を中国人の中国語教育に用いるようになる。「外国語教育」と「国語教育」の区別も難しい。そこで可能な限りも中立的な表現として、「言語」と「言語教育」という用語を用いる。書き言葉と話し言葉の区別や、言語の分類についても、記述する用語そのものに世界の見方が表象されている。本研究では、統一した用語を用いず、使用された表現をそのままか、可能な限り中立的な日本語に翻訳する。

言語は、日本語に統一する。日本以外の人名、地名、書名、テキスト名は、中国語表記

⁴⁷ 同 19 頁

或いはあるファベット表記とし、そのほかは日本語に翻訳する。翻訳者は、注記がない限り筆者である。漢字表記は、日本語の新字体表記に統一する。年号は、西暦（グレゴリオ暦）に統一する。月日も注記がない限り、太陽暦（グレゴリオ暦）に従う⁴⁸。

1.3.3 本研究の対象とする範囲

本研究は、1895年前後の中国における、言語教育に関する言説を研究対象とする。1892年から1898年に出版或いは公表された、新聞や雑誌の論説、著作の序文、日記などを文献資料として参照する。

1.4 本章のまとめ

本章では、まず研究対象、問題意識、先行研究、研究目的、研究方法と枠組みを明らかにした。そして、民国期の先行研究には「国語運動史」が、建国期の先行研究には「文字改革」の史観が存在し、いずれも言語が段階的に発達していくと考える言語発達史観を前提としていることを解明した。

この史観にもとづく先行研究では、中央政府や中央の知識人が重視されるため、プロテスタント宣教師と盧戇章は重視されなかった。盧戇章の言語教育観は、研究対象として深く研究されることがなく、プロテスタント宣教師が発行する『万国公報』も言語教育史の史料から切り落とされた。

1895年前後に増えた民衆への言語教育に関する言説に対しても、日清戦争の敗戦によって愛国心が高揚したためと理解し、さまざまなアクターの持つ背景や目的、アクター間のつながりや相互の影響が深く探求されることもなかった。

⁴⁸ 中国でのグレゴリオ暦の導入は、辛亥革命（1911）に始まる。

第二章 盧戇章の移動した領域とそれぞれの言語教育観

本章では、まず盧戇章に焦点をあてた先行研究によって、盧の経歴を確認する。そして、盧の移動した領域をたどり、その言語教育観がどのように形成され、拡大したのかを明らかにする。

本章は、次の史実の解明を目指す。

- 1) 盧は、福建省同安県の「農」の領域から、科挙を目指した。
- 2) 盧は、科挙に失敗後、同安県に出現した「洋」の領域としてのキリスト教に触れた。
- 3) 福建省廈門のプロテスタント宣教師は、民衆への言語教育を試みていた。
- 4) 盧は、プロテスタント宣教師から、民衆への言語教育の着想を得て、自身も試みた。
- 5) 上海のプロテスタント宣教師によって発行された『万国公報』は、1894年の戦争報道によって、中国の知識人に広く読まれ、ジャーナリズムの領域を形成した。
- 6) 盧の言語教育観を著した論説が『万国公報』に掲載され、ジャーナリズムの領域で拡散した。
- 7) 梁啓超を初めとする朝廷と中央の知識人は、盧の論説を模倣した。

2.1 盧戇章に焦点をあてた先行研究

前章で検討したように、先行研究は、盧の「切音字」以外を、評価することはなかった。現在に至るまで、盧個人に焦点を絞った系統的な先行研究は、白滌洲（1900-1934）と許長安（1936- ）による以下の研究のみである。

- ・白滌洲（1930）「紹介国語的急先鋒（盧戇章）」『国語週刊』8-10期
- ・許長安（1992）「語文現代化運動的先駆盧戇章」『語文建設』第11期
- ・許長安（1992）「盧戇章対語文現代化的貢献」『語文建設』1992年第12期
- ・許長安（2000）『語文現代化先駆 盧戇章』厦門大学出版社

盧戇章は、1928年に没するが、それまで厦門で『中華新字』三版を出版するなど出版活動を続けていた。中央からは既に忘れられた存在だったが、自らも「切音字」を作ったことのある中華民国教育部の呉稚暉（1865-1953）は、その頃まだ盧を評価していた。呉は、盧の死後に彼の事跡をまとめることを教育部国語推進委員だった白滌洲に命じる。

1930年、白は、長女の盧天徳に手紙で調査を依頼する。盧天徳は盧戇章の事跡を「中華首創音字之元祖盧戇章先生」としてまとめ、白に送る。白は、盧天徳の文章をもとに、『紹介国語的急先鋒（盧戇章）』を『国語週刊』8～10期に掲載した。

許氏は、厦門大学で文字改革を研究し、厦門市政府の委託で盧戇章の事跡を調査した。現在、厦門市鼓浪嶼には、盧戇章の像と「拼音小道」が設置されているが、これは許氏の尽力によるものである。本研究にあたっては、氏から貴重な助言をいただいた。

2.2 盧戇章の経歴と領域

盧戇章の経歴を、許(2000)の「盧戇章年譜」をもとに整理する⁴⁹。以下の年齢は数え年による。盧戇章の経歴を概観すると、いくつもの領域を横断していることがわかる。福建省の村落(1~19歳)、厦門のプロテスタント宣教師(20歳~)、シンガポールを中心とする華僑社会(20~24歳)、中央の官界と知識人界(42~45歳、52~53歳)、日本統治下の台湾(46~48歳)である。それぞれの領域で、社会上昇を試みるが、結局はすべて失敗している。しかし、結果として、盧は、19世紀末に中国に出現した、言語や価値観が全く異なるさまざまな領域を移動し、媒介者として作用した。

2.3 盧戇章の経歴からみた領域

ここでは、1895年までの盧戇章の経歴をもとに、当時の中国に存在したさまざまな「領域」について検討する。

2.3.1 同安県の「農」の領域(1~19歳)

盧戇章は1854年に「農」として、福建省同安県古庄村に生まれた。生家は、同地方で伝統的な四合院で、正面には先祖を祭る祭壇があり、その両脇が居住空間となっている。父を早くに失う以前、盧氏は村でも裕福な農家だった⁵⁰。6人兄弟で、末っ子の盧戇章だけが「儒」を学んだとされる⁵¹。

⁴⁹ 許長安(2000)『語文現代化先駆』116頁。台湾での経歴は、筆者が追加した。盧戇章の経歴の詳細は、「参考資料」「盧戇章年譜」を参照。

⁵⁰ 2012年許長安氏談。許氏によれば、盧戇章の子孫は、台湾、アメリカに移住した他、一部が厦門に残っており、生家を管理している。

⁵¹ 『中華首創音字之元祖盧戇章先生』、許(2000)76頁に収録。



写真1 生家入口

写真2 「盧巖章寓居」の表札

写真3 祭壇

幼い盧にとって、「家」とは祭祀によってつながる血縁集団であり、農業が生活の中心だった。その中で一人だけが「農」から離れ、「儒」として科挙合格を目指した。

『民国同安県志』によれば、同安県からは、盧巖章の生まれる10年前の1844年に進士が出ている⁵²。次の進士が出るのは1886年であり、その間約40年の間隔があいている。進士の前段階である挙人には、1870年に4人、1873年に5人合格している。科挙の上位に合格することは難関であるとはいえ、一介の「農」の子供でも、可能性はゼロではなかった。

盧は父親を亡くしながらも、19歳まで科挙のための学問を続けることができた。「農」にとって、子供は貴重な労働力であった。また科挙に必要な漢文は、自学自習では行うことができない⁵³。「農」に留まった兄らが盧の学資を支えた可能性もあるが、「義田」によって学資が賄われた可能性が高い⁵⁴。

盧の生まれた家の近くには、盧姓によって建てられたいくつかの廟がある。近年新たに建てられたものも多く、同祖、同姓が現代に至るまで強い紐帯を持っていることが伺える。このような血縁集団は、近代以前、共同管理する田畑を持っており⁵⁵、そこで得られた収入を、優秀な子供の学資や先祖祭祀、困窮者救済に当てていた。

⁵² 『民国同安県志』巻之十五、17頁

⁵³ 中国語には、日本語の仮名相当する表音文字が存在しなかった。『上大人』や『三字経』の識字教材を使って、漢字の読み方を一字一字、口づてで何度も教えてもらい、暗記する必要があった。

⁵⁴ 使途に応じて、学資向けの「書田」や「学田」、祭祀向けの「祭田」や「墓田」と呼ぶこともある。困窮者救済向けを「義田」と呼ぶこともある。

⁵⁵ 「族産」と言う。これによって運営される塾を「族塾」と呼ぶこともある。



写真 4、5、6 生家近くの廟、盧姓によって現代も祭られている。

このような村落領域では、「儒」は「官」に連なる階層であり、「読書」をし、科挙に合格することが社会階層の上昇を意味した。進士や挙人を出すことは家、一族、村の浮沈に関わることであり、優秀な子供は、資力にかかわらず一族の支援を得ることができた。

反面、このような教育投資は見返りを期待したものであり、合格の可能性がない者には、「読書」は認められない。盧の家でも 5 人の兄たちは、「農」として「読書」とは無縁だった。科挙受験生も、「官」に登る可能性がなくなると、支援は打ち切られる。「農」でも「官」でもない、読書人としての「儒」は、村落社会では無用の者だった。死ぬまで受験を続けるか、田舎教師に甘んじるかこれ以外の道はなかった。

盧は、府試に落第し、科挙試験の最も低い階層である「文童」に留まった⁵⁶。盧は、いこの盧貞趙の家塾や隣村の英埭頭義塾⁵⁷で教えながら、三年に一度の次の受験の機会を待つはずだった。しかし、盧は通常のコースを外れ、キリスト教の教化を受け、シンガポールに向かう。盧は伝統的な村落共同体を離れ、東南アジアから中国南方へと拡張してきた「洋」としてのキリスト教の領域に移動していくことになる。

2.3.2 同安県に出現した「洋」としてのキリスト教と廈門(20~24 歳)

盧は、1873 年、20 歳で隣村の双圳頭の王奇賞を通じて、『聖書』に出会う。双圳頭村には、現在も「双圳頭礼拝堂」が残っている。盧の生家の管理者によれば、今も日曜日になれば、古庄村からも老人たちが礼拝に来るとのことだった。

⁵⁶ 「県試」、「府試」、「院試」の受験生を指す。これらの試験は「学校試」と呼ばれ、国立学校への入学試験を得るための試験である。「学校」という呼称は、清末まで官を養成するための国立学校のみを指した。

⁵⁷ 義田で運営される塾を義塾と言う。地縁に注目し「村塾」と呼ぶこともある



写真 7、8 現在の双圳頭禮拜堂

The reformed church in America の現地組織である「厦門歸正会」が、1866 年に同安県に「双圳頭教堂」を建設している。盧戇章が、科挙合格を目指していたころ、キリスト教が、同安県にも農村にも広まっていたのである。

蒲（2003）によれば、1870 年ごろ潮州と汕頭周辺の農村部でキリスト教への改宗者が急増した。その原因には、太平天国の乱によって混乱していた広東省を、清朝が高圧的に「清郷」しようとしたことを挙げられる。「官」は、械闘や税の滞納などをおこなう不良民を捕らえて肅清を試みたが、疑心暗鬼にかられた「民」が、宣教師に庇護を求めてきたのである⁵⁸。「民」にとって、「洋」の機械文明の優越は明らかであり、「官」に対抗できる新たな勢力だと考えられた。

宣教師たちは、隣接する厦門から同安県にやってきた⁵⁹。同安県では、太平天国の乱の影響を直接受けていない。しかし、厦門がアヘン戦争で占領されたこと、その後西洋人による港湾都市として繁栄していたことは、清朝の権力の弱体化を示していた。

厦門は、アヘン戦争以前から港湾都市として栄えていたが、1860 年から 70 年代にかけて、洋館が建ち並ぶ西洋的な港湾都市として生まれ変わる⁶⁰。アヘン戦争の敗戦による不平等条約によって、清の法律の及ばない租界が設定され、太古行（スワイヤー商会）や滙豊銀行（香港上海銀行）などの西洋の大資本が進出した。対岸の鼓浪嶼には、西洋人の居住用の瀟洒な洋館が建設された。

開港後の厦門は、茶葉などの通商だけでなく、華人の送り出し港としても栄えていた。清代を通じて、福建省では、人口が食料増産を上回る勢いで増加していた。盧が科挙に失敗した年にも、同安県で飢饉が発生している⁶¹。人口圧力の高まりは移民を生み出し、台

⁵⁸ 械闘とは、水利や土地をめぐる対立する集団間の抗争。

⁵⁹ 清末の同安県は、泉州府に属していたが、現代の行政区画では厦門市同安区になっている。

⁶⁰ 港湾都市としての厦門については、恩田重直（2003）を参照。

⁶¹ 「同治元年夏五月地震、三年飢饉、九年大干ばつによる飢饉。民は草の根を掘り、落

湾や東南アジアへの入植が、アヘン戦争以前から常態化していた。1836年に書かれた『廈門志』には、清朝がしばしば渡航禁止令を出し、取り締まりを行っていたことが読みとれる。

新天地で成功した華人は、一族の若者を故郷から呼び寄せる。故郷でも、少ない土地で若者をくすぶらせるより、若者に一旗を揚げさせたいと考える⁶²。盧より少し時代が下るが、シンガポールでゴム製造に成功し、廈門大学を設立した陳嘉庚（1874-1961）も同安県出身者である。1874年、21歳の盧もシンガポールに向かう。

2.3.3 宣教師の民衆への言語教育観と教会ローマ字（25～41歳）

盧巖章は、シンガポールで英語を学び、1878年に帰国する。帰国後に盧は、華人に英語を教え、西洋人に華語を教えることにより生計を立てる。盧が居を構えた鼓浪嶼は、アメリカやイギリスの領事館がある西洋人の居住空間であった。

盧は、『一目了然初階』の序文で、英国宣教師馬約翰の『英華字典』の翻訳を手伝ったと回想している。馬約翰とは John Macgowan(?-1922)、『英華字典』とは *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect* (1884) を指す⁶³。

John Macgowan は、1868年に廈門に赴任した London Missionary Society のプロテスタント宣教師である。London Missionary Society は、The reformed church in America と並んで、アヘン戦争直後から廈門で布教を始めていた。両者は、廈門で競争しながらも協力関係にあった。当時の廈門には、Carstairs Douglas (1830-77)、John Van Nest Talmage (1819-92) らのプロテスタント宣教師がいた。

廈門で布教活動をおこなったプロテスタント宣教師と、16-17世紀に中国を訪れたカトリック宣教師とを比較すると、布教のために中国語と中国文化を研究した点で彼らは共通している。Matteo Ricci (1552-1610) は、16世紀に中国で布教を試み、最初に中国語をローマ字表記した著作『西字奇跡』を著した。19世紀のプロテスタント宣教師も、中国語をローマ字で転写し、学習を試みた。

両者の違いは、カトリック宣教師が、最終的に皇帝と朝廷の官僚を通じて布教を図ろうとしたのに対し、プロテスタント宣教師は、民衆が自ら聖書を読むことを目指した点にあ

ち葉を煮て食べている。飢餓者が道にあふれている」『同安県志』巻之三、12頁。

⁶² 華人の労働者である「華工」について、彼らは自由意志ではなく、西洋資本の商社による詐欺や人さらいによるものとする見解もある。呉鳳斌（1986）を参照

⁶³ 黄温良（2005）50頁

る。布教の対象が官僚であれば、聖書の教えを、官話で伝え、漢文に書き表せば、相手に理解させることができる。翻訳上の概念の行き違いや相手を信仰に導くかどうか、という問題が生じるが、キリスト教の理解は可能となる⁶⁴。

しかし、布教対象が民衆では、書き言葉である漢文はもちろん、話し言葉も方言に分かれており、プロテスタント宣教師の言葉は民衆に通じない。漢文も官話も庶民とは無縁のものだった。

19世紀のプロテスタント宣教師も当初は、中国の民衆が朝廷の官僚と同じく文明化された存在だと考え、官話と漢文聖書による布教を試みた。アヘン戦争以前に、中国での布教を試みた Walter Henry Medhurst (1796-1857) は、1838年に「中国で文字を知っている人の数は、驚くほど大きい。男子の半分が読むことができ、…」と述べている⁶⁵。

しかし、実際に民衆の中に入り、布教活動を行ってみると、民衆は誰もプロテスタント宣教師の言葉を理解できなかった。アヘン戦争直後に廈門で London Missionary Society による布教が開始されたとき、民衆に向けて官話で教えを説くと、人だかりができ、漢文の小冊子は瞬く間になくなった。プロテスタント宣教師は布教の成功を喜んだが、4年を過ぎても誰も入信しなかった。官話を話す外国人が物珍しかっただけで、誰も宣教師の話を理解できていなかったのである⁶⁶。

1850年、The reformed church in America から廈門に派遣されていた Talmage は、次のように回想している。

「とくに信者が神の言葉を手に入れ、そして自分自身できちんと読み取ることができ
るような方法について、宣教師はずいぶん頭を悩ませている。この地区できちんと
(intelligently) 本が読める人の率は、男で10人に1人以下であり、また女ではごくまれにし
かそういう人に出会わない」⁶⁷

廈門のプロテスタント宣教師は、神の言葉を理解させるために、自分たちが民衆の話す

⁶⁴ カトリック宣教師にとっては翻訳が問題であった。神を「天」と翻訳し、儒教の概念を用いたことにより、後に教皇から中国での布教を禁じられる(教皇クレメンス 11 世の回勅)。

⁶⁵ 蒲 (2009) 5 頁

⁶⁶ Richard, L.(1899), pp.484

⁶⁷ 蒲 (2009) 9 頁

方言を学ぶと同時に、共通の書き言葉を民衆に教える必要があると考えた。

1852年、Talmageらは廈門語のローマ字による綴り方の入門書『唐話番字初学 (Tng-oē Hoan-jīChho-hák)』を出版する。この話し言葉を書き言葉として綴ったローマ字綴り字は、後に「教会ローマ字」と呼ばれるようになる⁶⁸。

教会ローマ字による廈門語聖書(1852)をはじめ、その後『hian Lo L êk th êng (天路歷程)』(1853)、『Lo-tek êchheh (路得記)』(1853)、『Íóng Sim Sin Si (養心神詩)』(1859)、『Y êw t'a e t'e t'o ô (犹太地区地図)』(1861)などが次々出版された。

教会ローマ字は、地域ごとで異なる話し言葉をそのまま綴ることができ、簡単だったため、後に大きく広まった。福建からの移民の多い台湾では、The Presbyterian Church of Englandの宣教師 Thomas Barclay (1849-1935)によって、教会ローマ字新聞『台湾教会公報』(1885-)が発行された。

カトリック宣教師が漢文と官話の習得に留まったのに対し、廈門のプロテスタント宣教師は、民衆の教育を試みた点で決定的に異なる。民衆に対して、道具としての言語教育を行うという思想と方法を、プロテスタント宣教師は初めて中国に持ち込んだのである。盧の言語教育観と手法は、ここに由来している。

1892年、盧贇章は、自ら「中国第一」(中国初)と称する「切音新字」の入門書『一目了然初階』を木版で出版する。

2.3.4 上海の宣教師とジャーナリズムの領域の誕生 (42~44歳)

広州や寧波などの他の開港都市から、布教を進めていたプロテスタント宣教師も、廈門のプロテスタント宣教師と同じく、民衆の言葉の問題に直面する。

1877年と1890年に上海で開かれた、中国全土のプロテスタント宣教師会議では、聖書などの出版物、学校教育、識字教育の言葉を巡って議論となる。そのときの論点は以下の通りである⁶⁹。

- 1) 文体について文語を選ぶか、口語を選ぶか。

⁶⁸ 中国ではもともと庶民の話し言葉は、「白話」と呼ばれた。漢字で書き記した白話は、「白話文」と呼ばれる。教会ローマ字は、「白話字」とも呼ばれるが、「白話文」と生まれた社会文脈は異なる。

⁶⁹ C・ラマール(2005)「地域語で書くこと—客家語のケース(1860-1910)」(村田2005、177-178頁)

2) 口語の場合、地域言語ごとに出版物を刊行するか、あるいは国語の機能をまだ十分に整えていない「官話」「白話文」がそのうちに「国語」に発展することを期待して、「官話」に統一するか。

3) (地域言語での出版活動をつづけると選択した場合) ローマ字表記か漢字表記か。

聖書を文語に翻訳することは、最も早く行われた。しかし、説教で文語をそのまま読み上げても民衆には理解できない。白話文で書くと知識階層に「みっともない」と思われるうえ、大きな方言差があった。

プロテスタント宣教師は、このように書き言語と話し言葉の乖離、方言差の大きい中国をみて、ラテン語に支配された宗教改革以前のヨーロッパの状況を想起する。蒲 (2009) は、寧波の宣教師ラウリーの次の言葉を引用する。

「現在の彼らの学問と、それが書かれるスタイルから、私は宗教改革以前のヨーロッパの状態をつよく連想する。そこには学識者が存在し、日常生活の言葉とは違った、普通の人々には理解できない、学習によって得た言葉を持っていた。…宗教改革ののち、考えること、話すこと、書くことのあたらしい方式が導入され、古いものは消滅している。卑見では、まさに同様に大改革が中国に起こるに違いない。」⁷⁰

15世紀にルターは、聖書を民衆の言葉としてのドイツ語に翻訳した。当時のドイツでは、官庁で使用される書記言語と、民衆の言葉が異なり、方言差も大きかった。民衆が話し言葉で聖書を読み、説教を聞くことにより、話し言葉と書き言葉が標準化していき、ドイツ語は言文一致と言語統一へと向かい始める。ヨーロッパ各国に宗教改革が広がるに伴い、口語訳聖書が各地で出版され、各国に国語が生み出す契機となった。プロテスタント宣教師は、このドイツ語普及のプロセスを意識しており、中国にも言文一致と言語統一が起こることを期待していたのである。

ただし、このような意識は、プロテスタント宣教師の領域で共有されているにすぎず、清の朝廷や中央の知識人階層の領域と交わることはなかった。ところが開港都市では、両者が全面的に交差することがないとはいえ、徐々に接触領域が生まれていく。

ここで新たに生まれつつあったジャーナリズムという領域に注目したい。プロテスタン

⁷⁰ 蒲 (2009) 9 頁

ト宣教師は布教のために、活版印刷を行い、そのための機器を中国に持ち込んだが、漢文の執筆と校正には中国の知識人の力を借りなければならなかった。王韜（1828-1897）のように宣教師の助手から、自ら機器を買い取って、出版社を設立し、新聞を発行して「ジャーナリスト」に転身するケースもあった。王は、中央の知識人の領域からみれば、科擧の郷試に失敗した「秀才」に過ぎない⁷¹。

中国の近代的ジャーナリズムは1870～80年代に始まるとされる。国内には清朝による洋務運動に伴う近代化があり、国外では、台湾事件(1871-1874)や琉球処分（1871-1879）など、清朝による秩序の崩壊にともない、緊張が高まっていた⁷²。

この時期に発刊された主な民報には、以下のものがある⁷³。

- ・ 『循環日報』：1874年、王韜らによって香港で創刊した。日刊紙。
- ・ 『申報』：1872年、Ernest Major（1841-1908）によって上海で創刊し、中国人より編集された。日刊紙。
- ・ 『万国公報』：1868年、『教会新聞 (The Church New)』として、Young John Allen (1839-1907)らプロテスタント宣教師によって上海で創刊された。1874年に『万国公報』に改名した後は月刊誌となり、1877年からは、Allenも設立に関わった出版社「広学会（The Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge Among the Chinese）」から発行される。Allenの逝去（1907）に伴い、1907年に停刊される。

これらの新興のジャーナリズムの中でも、『万国公報』は、日清戦争に関する「報道」と卓越した「評論」で、読者を広く獲得した。鄭師渠（2001）は、日清戦争以降の『万国公報』の影響力について、「注意すべきなのは『万国公報』の知名度が急に高まり、広範な影響力を持つようになったことである」と述べる⁷⁴。日清戦争について積極的に報道と評論を行ったことが「中国の朝野の士大夫の関心を引いた」とする。

『万国公報』の日清戦争に関する報道は、1894年7月「朝鮮紀乱」の掲載に始まる⁷⁵。9

⁷¹ 王韜と宣教師の関係については、西里喜行（1984）を参照。

⁷² 西里喜行（1991）47頁

⁷³ 日刊の新聞と月刊の雑誌は、「報」と呼ばれていた。民間の資本で運営された報を民報と呼び、『京報』などの朝廷内の「報」は、ここではジャーナリズムに含めない。

⁷⁴ 鄭師渠（2001）170頁

⁷⁵ 『万国公報』第六十六冊、前掲書 14555頁

月には「日本宣戦布告書」を西洋の新聞から転載している⁷⁶。日清戦争の端緒となる日清の朝鮮出兵が6月であり、宣戦布告は8月のことであり、その報道の迅速さがうかがえる。「朝鮮紀乱」は「乱朝記」に改題されて、戦争を通じて連載された。2月に講和会議が始まると、『万国公報』はその交渉経過や日清双方の発言内容を刻々と伝えている。

『万国公報』を通じて、日清戦争というできごとは、「朝野の士大夫」に共時的に共有された。つまり近代的なジャーナリズムという新たな領域が形成されたのである。この領域は、プロテスタント宣教師によって提供されたものであり、プロテスタント宣教師の領域と中央の知識人の領域が、ここで重なりを持つこととなる。

『万国公報』の体裁は、まず巻頭にAllenら編集部的主張を長文で述べる「説」や「論」が掲載される。続いて、清朝に関する「大清国事」が掲載され、「大美国」や「大英国」などの各国の動きを伝える「各国要事」が掲載される。巻頭には、日清戦争以前から西洋の文明を伝え、中国に変革を求めるプロテスタント宣教師たちの「説」や「論」が掲載されてきた。

中国の士大夫たちは、「大清国事」の「乱朝記」を読み、日清戦争の経緯を知ると同時に、プロテスタント宣教師の「説」や「論」を読むようになった。プロテスタント宣教師もそれを知り、「以寛恕积仇怨説」など、日清戦争と改革を関連付けた評論を積極的に掲載する⁷⁷。

このジャーナリズムの領域としての『万国公報』に、1895年7月、盧戇章の「変通推原説」が掲載される。この領域では、中央の朝廷や知識階層とは遠く離れた廈門の「文童」が、彼らと対等に意見を述べることができたのである。

盧戇章が、『万国公報』に寄稿した経緯については、不明な点が多い。盧戇章の最初の投稿である「変通推原説」には、「本館附志」として編集部の賛意を示すコメントがつけられており、1896年1月の蘇易の「書同邑盧君切音字書後」にも、「公報館志」として、盧の次の投稿を待ち望むコメントがつけられている。『万国公報』は、盧の意見が編集部の意見を代弁するとして強く支持していたのである。

この時、『万国公報』を出版する「広学会」の責任者は、Welsh Baptist Missionary Societyから派遣された宣教師Timothy Richard (1845-1919) だった。Richardは、1870年から中国で伝道を開始するが、1876年に山東省青州、1877年山西省太原で起こった飢饉に遭遇する。

⁷⁶ 『万国公報』第六十八冊、前掲書 14664 頁

⁷⁷ 『万国公報』第七十二冊、前掲書 149414 頁

苦しむ民衆を目の当たりにし、病院や学校、孤児院の建設を行ったが、この経験を通じて、民衆を統治する清朝が、西洋文明を受け入れ、民衆の生活を改善すべきだとの、考えを持つようになる。

Richardは、1891年から「広学会」の責任者になると、『格物探原』や『七国新学備要』、『泰西新史攬要』など、西洋文明を紹介する書物を次々と出版する。『万国公報』上でも、朝廷の官僚や知識人階層に向けて、西洋文明の紹介を積極的に行った。民衆に教育を受けさせるためには、まず朝廷がその重要性に気付かなければならない、と考えたのである。

編集部の中の人物が盧巖章の説に最初に注目したのかは、不明である。或いは、盧みずから積極的に売り込んだ可能性もある。

Richardは、民衆への教育を重視し、廈門のプロテスタント宣教師と同じく、民衆の言葉の問題に強い関心を持っていた。1895年以前に、中国のプロテスタント宣教師のための英字新聞*The Chinese Recorder*に、中国語の表記システムに関する論考を掲載している⁷⁸。

Richardは、1892年の盧の『一目了然初階』の「切音字」についても、知っていた可能性が高い。

『万国公報』において、編集部は盧の「切音字」案ではなく、盧の民衆への言語教育観に注目した。編集部は、盧の「変通推原説」に対して、「入塾後四五年で識字読書ができる簡便な方法を求めること」が重要であるとコメントしている。編集部が特に掲載した読者からの反響である、蘇易（1896.1）「書同邑盧君切音字書後」には、「天下の時勢を論じる者は、曰く富国、曰く強兵と言う。その術を問うと、多くは富強の術は、鉦産を開き、鐵路を築き、軍機を購入することだと言う。私は初めて教育で変革をすると言う意見を聞いた」と述べる。

『万国公報』には、盧の「説」が掲載されただけで、「切音字」案そのものは掲載されなかった。編集部は、民衆を教育の対象とすべきとの宣教師の考えを盧に代弁させたのである。

2.3.5 ジャーナリズムと中央の官界と知識人の領域の重なり（45歳）

『万国公報』が、中央の官界と知識人層に広まったことについて、Richardは、後に回想

⁷⁸ 例えば、Richard, Timothy (1894), “Murray’s New Phonetic System of writing Chinese Characters”, *The Chinese recorder and missionary journal vol.25 (1894)*, National Taiwan University Press, 2011 [Reprint ed.], pp.389-390

録*Forty-Five Years in China*で以下のように述べる。

「1894年の間に、『万国公報』の発行量は以前の倍になった。需要が急激に増えたので、一か月以内に、再版しなければならなかった。Allen博士の戦争に関する文章も、中国で唯一の信頼できる報道とみなされて、非常に歓迎されている。中国招商局の責任者たちも購入する部数を倍にした。私たちの出版物を首都の高級官僚たちに送っているのである。上海に住んでいる翰林の官僚〔ママ〕も、『万国公報』を北京の翰林の友人たちに送っている。」⁷⁹

広学会の出版物も広く読まれるようになっていた。Richard は、上海では2元の『泰西新史攬要』が、西安では6円で売られていることや、海賊版が出回っていることを例にとり、日清戦争を契機に広学会の出版物がいかに広がったのかを述べている。そして、「ここに至って、長くキリスト教と非キリスト書籍の間に存在した垣根が取り払われたのである。書籍の商人たちは、広学会の出版物を売る価値がない二度と思わないだろう」と、中国の読書階層に受け入れられたことを喜んでいる⁸⁰。

このような『万国公報』に論説が掲載されたことは、盧の人生を一変させた。最初に論説が掲載された約1年後の1896年10月、盧は、「中国切音新字説」で、「中西同志諸君」からの手紙が続々と寄せられていること、26歳から43歳の今に至るまで昼夜を問わず苦勞して「切音新字」を創作してきたこと、近日中に北京の言葉を表す「新字」である「北京腔之新字」を作成し「中西同志諸君」に報告することを読者に告げている⁸¹。

そして、1898年7月には盧の「切音字」は、皇帝に上奏され、光緒帝（1875-1908）からの上諭（皇帝からの指示）が下る。

「上諭、都察院が代奏した、字は学ぶのに難しいため、切音字を用いることを請うとの生員林輅存の上奏文については、総理各国事務衙門に、盧巖章等の書いた書物を取り調べさせ、詳細な調査を報告させる。此を欽めよ」⁸²

⁷⁹ Richard, Timothy (1916) 232 頁

⁸⁰ 同 233 頁

⁸¹ 盧巖章（1896.10）「中国切音新字説」『万国公報』第九十三冊、前掲書 16355 頁

⁸² 『光緒実録』光緒 24 年（1898）7 月戊寅の条。

林軅存（1879-1919）とは、盧戇章と同じく福建省出身の生員である⁸³。この論旨の通り「切音字」が取り調べられ、朝廷に採用されれば、中国全土で用いられることになる。盧自身も朝廷で重く用いられることになっただろう。

しかし、この直後の1898年9月、西太后（1835-1908）ら変法に反対する派閥によって、光緒帝は幽閉され、変法派は捕縛の上、斬首された。梁啓超らは日本へ亡命する。変法運動で提唱された改革も霧散し、プロテスタント宣教師と改革派の蜜月も終わる。

1905年、盧戇章は、朝廷に7年前の「上諭」の履行を求め、新たな文字案である『中国切音字母』を持って清朝の学部を訪れる⁸⁴。「総理各国事務衙門」は既に存在せず、光緒帝も幽閉されたままだった。学部は、北京大学の西洋文学系の前身となる訳学館に審査を命じる。訳学館は、一、字母が不完全であること、二、韻母に入声がないこと、三、書き方がでたらめであることを指摘する長文の報告書を提出する⁸⁵。審査を担当した汪榮宝（1878-1933）は、日本留学から帰国したばかりの気鋭の学者だった。

盧戇章の主張した民衆への言語教育は、すでに朝廷と知識人に共有されており、海外で近代的な教育を受けた知識人たちが、その実現を行う段階に入っていた。

2.4 本章のまとめ

本章では、盧戇章の経歴を通じて、清末におけるいくつかの社会領域の存在を確認し、それぞれが接触していった経緯を解明した。

まず、盧は、清末の同安県の農村における村落共同体から科挙を目指すのが失敗する。そのころ、港灣都市厦門からやってきたプロテスタント宣教師が農村で布教を始めており、盧は、キリスト教に触れることになる。厦門のプロテスタント宣教師は、民衆に布教を行うために、地域ごとで異なる方言をローマ字で記述する方法を研究した。地域語の辞書の編纂、聖書の翻訳、出版と印刷などを行い、やがて、その成果を用いて民衆への言語教育を行う。すべての民衆を対象とした言語教育が中国で行われたのは、これが初めてだった。盧は、これをまねて表音文字「切音字」を作成し、『一目了然初階』を出版する。

⁸³ この時点の林の地位について、許（2000）は、工部虞衡司という官吏としている（34頁）。拼音文字史料叢書に収録された上奏文にも六部の下級官僚を指す「林部郎」とある。しかしこの時、林はわずか19歳にすぎない。孔祥吉（2004）は、科挙試験における「生員」としている。『光緒実録』には「生員林軅存」とあり、孔の説が正しい。

⁸⁴ 学部は、1905年に清朝に設けられた教育を司る部門。

⁸⁵ 許（2000）43頁

厦門のなど中国各地のプロテスタント宣教師は、上海を中心に情報を交換しており、上海ではプロテスタント宣教師による雑誌『万国公報』が発行されていた。ここに掲載されたプロテスタント宣教師の論説は、当初中国の知識人の関心を引くことはなかったが、1894年の日清戦争の開戦を契機にして急速に広まる。戦争の進展が刻々と伝えられることにより、中国の知識人の間でも近代的なジャーナリズムの領域が生まれていく。これにより、プロテスタント宣教師の領域と中国の知識人の領域が接点を持ち始める。

『万国公報』に掲載された盧の論説は、プロテスタント宣教師を代弁するとともに、中国の知識人に膾炙しやすいものであった。盧の経歴が、伝統的な中国の領域と西洋のプロテスタント宣教師の両方にまたがっていたことによる。盧の主張した民衆への言語教育の重要性は、1895年以降中国の知識人によって再生産され、共有されていくことになる。

第三章 最初に提示された民衆への言語教育観

本章では、『一目了然初階』の序文である「中国第一快切音新字原序」（以下、「原序」と省略する）で提示された言語教育観を検討し、次の課題を検証する。

- 1) 先行研究では、清末の「文字改革」に共通する言説の一つとして考えられていた。
- 2) 「原序」は出版当初、注目されなかったが、1895年以降に多くの中国の知識人に参照された。
- 3) 「原序」は、民衆を国家の構成員としてとらえ、民衆の教育の程度によって国家の豊かさや強さが決まると関連づけた。
- 4) 「原序」は、中国の文字である漢字を世界の文字と対比させ、漢字の習得は難しく、時間がかかるので、教育言語には不向きであるとした。
- 5) 「原序」は、言語教育の問題を「言」（話し言葉）と「文」（書き言葉）の不一致であると規定した。
- 6) 「原序」は、方言による話し言葉の不一致を解消し、一つの標準的な話し言葉の導入を提唱した。
- 7) 「原序」で提示された漢字の学びやすくするための方法は、現代中国の言語政策と重なり、中国語の近代化の方向性を規定した。

3.1 「中国第一快切音新字原序」に関する先行研究

先行研究では、黎（1934）や倪（1959）でも「原序」について検討がなされているが、研究者の史観が強く影響し、正確に理解されてきたとは言い難い。

盧の研究者である許（2000）は、「文字改革」の史観を踏襲しながらも、「原序」が全面的に清末切音字運動の理論を反映し、最も早い言文現代化理論であるとして、比較的詳細に分析している。その分析は以下の通りである。

- 1) 漢字が煩わしく難しいことを指摘
- 2) 漢字が煩雑さから簡便さに変化してきた歴史的説明
- 3) 切音字を創製した理由
- 4) 切音字の優位性
- 5) 切音字の推進方法
- 6) 言文統一の主張

台湾の黄（2005）は、「原序」と『万国公報』に掲載された「変通推原説」を合わせて、盧戇章の主張を検討している。「変通推原説」の内容に言及した研究としては貴重であるが、「原序」の比率が低く、検討が十分に行われたとは言えない。

近年の中国国内の研究動向として、清末の「文字改革」の背景にある思想に焦点を当てた研究が増えている。王東杰（2009、2010）、時（2013）などの研究で、「原序」に言及している。しかし、清末の「文字改革」が同時に各地で発生したと捉え、アクター間の関係性を無視しているため、「原序」がそれほど重視されているわけではない。

本研究では、許（2000）の研究を参考にしながら、盧自身の分類に基づいて言説を検討する。

「原序」は、1895年まで注目されなかったが、盧の言説が『万国公報』に掲載されてから多くの知識人に参照され、その言説が再生産されていった⁸⁶。清末から民国期の「国語運動」、建国期の「文字改革」と、中国の民衆と言葉、国家を規定する一つの形になっていった。本研究ではそれを踏まえて、検討したい。

3.2 「中国第一快切音新字原序」の言説の分類

「原序」の冒頭では、盧が「切音新字」を創製するに至った経緯が述べられる。そして、盧は、次のように課題を挙げ、「切音新字」の重要性を説いていく。

- 1) 中国の文字は天下で最も難しい
- 2) 文字による富強
- 3) 天下はあまねくみな切音字を用いている
- 4) 西洋で文風が盛んなこと
- 5) 日本は切音字を用いて文風を興す
- 6) 中国には切音法があるが、切音文字はない
- 7) 土地の言葉による切音字
- 8) 南京言葉を各地の主要な言葉とする

- 1) 中国の文字は天下で最も難しい

⁸⁶ 1897年、沈学は「(盧の)新字が七、八千冊も印刷されたと聞き、甚だ欣羨(羨ましい)」と述べている。(沈学(1897.3)「節録致盧戇章先生第三函」)

盧は、まず中国の漢字の難しさについて指摘する。この指摘は、現代から見ればごく当然の指摘のように思える。しかし、伝統的な中国では、漢字の学習から始まる正書法の習得は、科挙を通じて官僚になるために必須のものだった。文人としての官僚とそれととりまく知識人は、漢字を自在に使えることで、民衆と区別されていた。漢字の起源は、祭祀文字であり、朝廷の書記言語として漢字は使われ続けてきた。このような漢字がもつ神聖性と権威を否定し、他国の文字と比較する盧の主張は、文字改革を通じた社会改革思想であった。

「中国の文字は、現在あまねく天下の文字のなかでも最も難しいものかもしれない」

漢字の難しさは、漢字の歴史の長さによる。黄帝に仕えた蒼頡が漢字を創って、文字と言葉に乖離が生じたとする。

「黄帝の時代に遡って、蒼頡が象形、指事、会意、転注、形声、仮借によって文字を作成して以来、今に至るまで既に遙か四千五百年余りが過ぎている。」

漢字の字体に着目し、字体は歴史の中で簡単になっていったとする。

「字体は時代ごとに代わり、古は雲書鳥跡文字が用いられ、その後蝌蚪象形文字が用いられ、さらにその後は篆隸八分が用いられ、漢代には八法になり、宋代には宋体字となり、みな難しさを避け、易しさに流れてきた。」

しかし、字数は時代を経て膨大な数に増えたとする。これをすべて学ぶことは不可能であり、盧は常用の漢字の存在を指摘する。

「康熙帝の御世に編纂された『康熙字典』では、40919 個の記号文字になっている。しかし、常用するものは、四、五千字に過ぎない。四書には 2328 の異なる文字があり、五経には 2427 の四書にない文字があり、十三経には合わせて 6544 字の異なる文字があり、その中から『爾雅』の 928 のあまり用いない文字を除けば、ふだん詩賦や文章に用いる文字は、五千字余りにすぎない。」

常用の漢字に絞っても、言語教育だけで十数年書かかるとする。四書五経の学習では、文字や文章を学びながら内容を学習していく。言語教育と教科教育は未分化であり、文字教育を取り出して早期に終わらせられれば、残りの時間を教科教育に使うことができる。そのために「切音字」が必要だとする。

「この数千字を知ろうとすれば、聡明な者でも十余年苦学しなければならない。故に、切音字が適当である。」

2) 文字による富強

盧は、「切音字」を用いることにより、民衆が学問を好み理を知るようになり、「格致」(事物の道理、物理)が振興し、国が富強になると述べる。

清朝は、アヘン戦争以降、西洋の武器を購入し、近代的な軍隊を作り上げようしていたが、盧の主張は民衆からの近代化を提唱する点で大きく異なる。清朝による上からの近代化では、民衆は、兵士の供給源と武器購入のための財源であるにすぎない。盧は、民衆を国家の構成員とみなし、近代的教育を受けて、文明の摂理を知ることによってこそ、中国が富強になると述べる。

この民衆への言語教育と中国の富強という問題は、日清戦争以降、中国の知識人に広く共有され、近代化のために取り組むべき課題として認識されていく。

「私が思うに、国の富強は、格致(事物の道理)に基づく。格致を興すことは、男女老幼が皆学問を好み理を知ることに基づいており、学問を好み理を知るとは、切音を文字と為すことに基づいている。」

盧は、「切音字」が漢字に取って代わるものとは考えていない。文字として書かれた漢字と話し言葉としての声の乖離が、学習を妨げていると考えている。日本語で漢字にひらがなでルビをふるように、「切音字」で読み方を表記すれば、自学自習できるようになる。

中国では、仮名に相当する表音文字が生まれなかった。塾に入った子供は、師の声に従って音読し、何度も復唱し、漢字の音を一つ一つ暗記するしかなかった。

「すなわち、字母と切法を習えば、教師がいなくても字は自学自習できる。字と話し言葉がいっしょであれば、口で読み上げたものが心に直接届く。」

漢字の数の多さ、音、画数、いずれも漢字学習を難しくしているが、画数の少ない「切音字」は容易に習得できる。その分、科目教育に多くの時間を割くことができる。盧の言う学問とは、儒学ではなく、種々の実学を指していた。

「また字画が簡易であれば、学んで知るのに容易であり、筆を持って（書くのに）容易であり、十余年の年月を節約することができる。この年月で数学、格致、化学などの様々な実学を専門として学べば、どうして国を患い、富強になれないことがあるか。」

3) 天下はあまねくみな切音字を用いている

盧は、世界の潮流としての「切音字」の優位性を説く。そして、「切音字」と識字率との関係を紹介する。

「現在、あまねく天のもと、中国を除けば、他の国は皆大概 2、30 の字母を切音字と為している。英米は 26、独法蘭 25、西魯面甸（不明）36、イタリアとアジアの西の六、七国は 22、欧米は文明の国であり、貧しい村や僻地の男女でも、10 歳以上で、読書しない者はいない。」

4) 西洋で文風が盛んなこと

具体的な数を挙げて、西洋の識字率の高さを強調する。

「去年の西洋の新聞によると、ドイツは全国で 100 人中読書できない者は 1 人しかおらず、スイスは 2 人、スコットランドは 7 人、アメリカは 8 人、オランダは 10 人、イギリスは 13 人、ベルギーは 15 人、アイルランドは 21 人、オーストラリアは 30 人。なぜだろうか？それは切音を文字と為し、文字と話し言葉がいっしょで、字画が容易であるためである。」

5) 日本は切音字を用いて文風を興す

盧は、西洋に並んで、日本の仮名文字も見習うべきだと主張する。この言説が、日清戦争以前に書かれていることは興味深い。日清戦争以前に、日本に習うべきだと主張するのは、黄遵憲などごく少数にすぎない。

日本の仮名を「切音字」に含めたことにより、後に、中国語の音声表記を「漢字筆画」（仮名文字をまねて漢字の一部を使用する）で行うのか、ローマ字で行うのか、という議論が起こる。中華民国は、注音符号として前者を採用し、中華人民共和国は拼音として後者を作用した。

「日本もまた中国字を用いているが、よく知っている人によると、47個の簡易な画をもって、切音字の字母と為し、文教が大いに興している。去年の日本の文教部の詳細によれば、現在国中に10862の学塾があり、教授する教師は合計62372人おり、在学し学んでいる者が280万前後、また光緒10年（1884年）には、男子学生319万人余り、女子学生296万人余りがいた。外国の男女が皆読書できるのは、この切音字のおかげである。」

6) 中国には切音法があるが、切音文字はない

盧は、西洋と日本の音声表記文字を紹介した後、中国にはそれに相当する文字がないと論ずる。ここで盧が目にするのが、中国の切音法である。

切音法は、反切ともよばれる。「東は、徳と紅の切」と表記して、ある漢字の音を、別の漢字の音を組み合わせる方法である⁸⁷。この方法は、中国の時代や地域によって異なる音韻を統一する方法として、広く普及した。現代でも、字典や韻書によって中国の古代の音韻を再現することができる。

しかし、漢字の読み方がある程度知っていなければ、新たな漢字の音を知ることができない。あくまで音韻を確認するための方法で、漢字を学ぶための方法ではない。この点を盧は以下のように指摘した。

「中国もまた切音があるが、韻脚と字母を合わせて一音にしたにすぎず、万国の切音でもっとも簡易なものである。その方法は、1382時梁朝間（不明）、西域の僧である沈約と神珙がインドの切音法を中国に伝えたもので、唐代は206字を字母と為し、宋代は160用

⁸⁷ 日本語で例示すれば、「東は、徳と紅の切」の場合、徳（トク）のトと紅（コウ）のウを組み合わせると、東（トウ）の読み方を表記できる。大島（2011）73頁

い、36文字を韻脚と為し、『康熙字典』ではその方法によって切音とした⁸⁸。字典の初めにある溪、群、疑などの36文字がそうである。すなわち二つの漢字を切り合わせ一つの音と為し、ある字をどの音で読むのか注釈するのに用いられ、簡易な字母を切り合わせて切音字にするのではなかった。」

7) 土地の言葉による切音字

盧は、漢字はそのままで、読みをそれぞれの土地の言葉で行えばよいと考えていた。まずは書き言葉としての漢字を共通語として成立させようと考えていたのである。

「もし切音字と漢字を併記すれば、その土地の言葉によって、十九省の府州県の城内と農村の男女に通じさせることができる。」

民衆が漢字を学ぶことを前提として、切音字だけで文章を書くことも勧めている。教会ローマ字文や日本の仮名文のような、民衆のための文字として考えていた。

「また切音字を知ることができるだけでなく、教師がいなくても自学自習することができ、快字（盧の創製した文字）で、手紙の往来、登記記入、本を書いて主張することができるようになる。また聖賢の伝承、内外の書籍、言葉と字義を翻訳できるようにもなる。数か月で国中の家々、男女老少に文字を知らない者はいなくなり、古え以来の一大文明国になるだろう」

8) 南京言葉を各地の言葉の主要な言葉とする

盧は、「原序」の最後で、南京の言葉によって、書き言葉と話し言葉を一致させ、各地の言葉を統一させれば、中国は一つの家のようなになる、と述べる。標準語の選定によって、民衆の言葉を統一し、中国は一つの家になると主張するのである。

中国では、書き言葉と話し言葉が一致しないだけでなく、各地方の話し言葉も全く異なっていた。清末まで、中国ではそれは当然のことであり、ことさら問題視されることはな

⁸⁸ 沈約（441-513）は、僧ではなく宋、齊、梁に使えた史学家・文学家であり、平声、上声、去声、入声の四声を唱えた。神珙は唐代の僧で、サンスクリット語の字母を伝えたと言われる。

かった。

書記言語としての漢字は、早くは『干祿字書』(7世紀)から「正」、「通」、「俗」に分類され、標準化が歴代の王朝で行われてきた。清末の漢字文化圏では、『康熙字典』が基準となっていた。

しかし、話し言葉については、漢字のような標準化は行われなかった。官に就くものは、上奏文を読みあげたり、民衆の訴えを聞いたりする朝廷の事務の中で、正しい音で文章を読み上げることが求められた。「正音」は、科挙の科目にもなり、それを教える「正音書院」も出現したが、広く普及せず、一時的なものにおわった。民衆の間では、共通語は「官話」として認識されていたが、それも朝廷が標準化し、広めようとしたのではない⁸⁹。

盧は、知識と情報の共通という観点から、中国を初めて言葉で統一しようと考えた。

「また一つの言葉に主眼をおくなら、十九省のうち、広東、福建、台湾を除く他の十六省は、大体官話に属しており、官話の中でももっとも通じているのが南方の言葉にほかならない。もし、南京言葉を通行の正字となし、各省の正音と為せば、十九省の言語文字は皆一律になり、文と話し言葉が相通じ、中国は大きくても、一つの家のようになり、辺境を守る者や異なる土地の音に出会っても無言でいることはなくなるだろう。新聞、告示、文書、および書籍は、いったん発せられるとすぐに各省の人々が知られるようになる。官府吏民もまたお互いに通じあい、費用をかけずに枝葉末節にまで伝えることができるようになる。」

3.3 民衆への言語教育観の導入による中国語の変化

ここでは、民衆への言語教育が意識されたことにより起こった中国語の変化を考察する。盧の言説を起点とし、中国の知識人の中で、漢字は民衆にとって難しいことが認識され、言語教育における学習の容易さが求められるようになる。その後、民国期、建国期を経て、中国語は、民衆に学びやすいように変化した。

図1は、伝統的な中国の識字教材として用いられていた「千字文」である。科挙を目指す子供は、5歳ごろになるとまず識字教材を用いて画数の少ない漢字を学ぶ⁹⁰。読み方を表

⁸⁹ 「正音」と「官話」については、平田昌司(2001)と石崎博志(2014)を参照。

⁹⁰ 識字教材は、「三字経」から始まり、「百家姓」、「千字文」へと進んでいくのが一般的であった。

わす表音文字は存在しないため、教師について読みあげたのち、何度も口誦して、声と文字を一致させていく。文章は文語体で、子供にとっては難しい内容だった。識字教材を学び終えても、四書五経にすすむと、再び新出漢字の読み方を一つ一つ暗記していく必要があった。

図2は、盧戇章の「切音字」を用いた教材である。漢字と厦門方言の表音文字が併記されている。子供の話す言葉と表音文字が一致しており、「切音字」を覚えれば、漢字を方言で読むことができるようになる。文章も、厦門の子供なら誰でも知っている民間伝承などが用いられた⁹¹。

図3は、現代中国の初等教育の「語文科」（国語科）で用いられている教材である。表音文字である拼音と漢字が併記され、読み方は標準語である普通語に統一されている。子供は、拼音を学ぶことにより、中国語の標準的な音声を身につけ、同時に漢字を読めるようになる。文章は、話し言葉としての普通語と一致する。

学習の容易さを意識することにより、表音文字が初等教育に導入され、段階的に漢字教育を行えるようになった。表音文字は、話し言葉と書き言葉を一致させ、話し言葉の統一をももたらした。民衆への言語教育によって、中国語そのものが変容し、現代中国語が生みだされた。

現代中国語は、建国期以来の言語政策によって創出された。『漢字簡化方案』の公布（1956）、『漢語拼音方案』の公布（1958）、普通語の推進によって、民衆への言語教育を普及させるための言語制度が整備された。その後、文革期の停滞を経て、『中華人民共和国義務教育法』（1986）で義務教育制度が整備された。

「簡体字」は、漢字の画数を減らし、教育課程で用いられる漢字字数を制限した。「普通語」は、話し言葉によって書き言葉の文体を規定し、話し言葉と書き言葉を一致させた。

「拼音」は、漢字の読み方を表記し、声と文字が容易に結びつくようにした。義務教育制度は、初等教育において言語教育を段階的に行い、中国語による教科教育を可能にしている。

「原序」で主張された民衆への言語教育観は、現代中国の言語政策にほぼ反映され、現代中国語を創出した。盧が時代を先取りしていたのではなく、その言語教育観が、梁啓超に模倣されて中国全土に広がり、民国期の「国語運動」、建国期の「文字改革」へと受け継がれたのである。

⁹¹ 許（2000）12頁

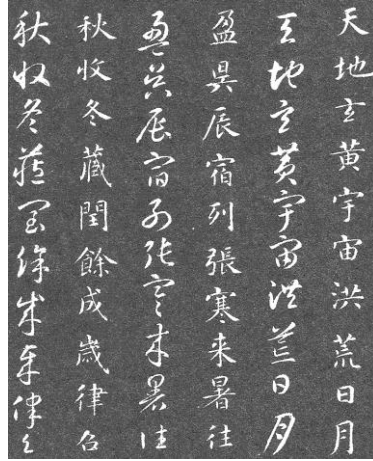


图1「千字文」⁹²

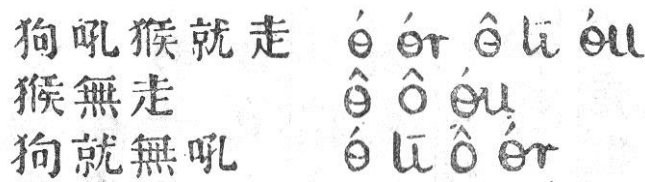


图2「切音字」⁹³



图3「拼音と簡体字」⁹⁴

3.4 本章のまとめ

本章では、「原序」で提示された盧翹章の言語教育観を検討し、民衆への言語教育が、国家の富強と結びつけられこと、中国の言語は、「言」と「文」が不一致であり、漢字が難

⁹² 小川 (1997) 3 頁

⁹³ 拼音文字史料叢書 (1956) 『一目了然初階』 14 頁

⁹⁴ 新課標小学語文閲読叢書 (2009) 『中国神話伝説』 1 頁

しすぎるために学校教育に適さないと指摘されたことを確認した。

この盧の言説は、1895年以前は注目されていなかったが、『万国公報』に掲載され、中国の知識人によって再生産され、共有されるようになる。先行研究に基づく一般的な見解では、「原序」を清末の「文字改革」に共通する言説の一つとしているが、史実は「原序」が「文字改革」の言説の原点となったのである⁹⁵。

民衆への言語教育観では、漢字を難しい文字とみなした。漢字を学びやすくするために、漢字と声の間をつなぐ表音文字の必要性を訴えた。後に表音文字の導入の方法を巡っては、ローマ字か別種の符号か、漢字との並行表記か漢字の廃止か、中国語を廃してエスペラント語のような別種の言語の導入するのか、などのさまざま考えが出現し対立した。建国期に確定した、拼音によって漢字の読み方を表記し初等教育を行うとの形式は、結果から見れば、盧の主張と似かよったものとなった。

⁹⁵ 例えば、「彼のこのような切音字と漢字を並行させるという観点は、切音字運動における一般的な観点だった」（「建国前的語文工作」『中国語言文字網』
<http://www.china-language.gov.cn/57/index.htm> 2015年1月12日閲覧）

第四章 『万国公報』への掲載と、中国の知識人の反応と再生産

本章は、盧戇章の提示した民衆への言語教育観が、中国の知識人の間にどのように広まり、共有されるに至ったかを検討する。

先行研究では、この過程を各地で個々に生まれたかのように考えていた。日清戦争に敗北した危機感によって、各地に愛国心に目覚めた知識人が、民衆の啓蒙のために「新字」を創りだした、と主張するのである。しかし、実際には『万国公報』というジャーナリズムによってつながり、わずかな時間差で連鎖的に生まれた。

本章は、出版・公表が確認された順にテキストを比較し、次の課題を検証する。

- 1) 1895年、『万国公報』に掲載された盧の三つの論説は、民衆への言語教育の重要性を、近代的な教育制度の中で訴えるものであったこと。
- 2) 1896年、『万国公報』に賛意を示す記事が掲載され、以降、蔡錫勇や梁啓超などによって、民衆への言語教育を訴える言説が再生産され、「新字」の創作が始まったこと。
- 3) 再生産の過程によって、近代的学校教育制度そのものへの関心は失われたこと。
- 4) 「新字」の主導権を巡る争いが生じ、支配的な表音文字が成立しなかったこと。

4.1 時系列による言語教育観に関するテキストの配置

倪(1959)は、「成稿」(書き上げる)などの公表までの準備期間も含めて時系列で配置しているために、実際にいつ公表されたかがわかりにくい。本研究では、どのような形で公表され、どの程度広がり、誰に読まれたのかを検討するため、公表されたことが確認できる時系列で配置する。

公表された時期について、最も信頼できるのは、定期刊行物だった『万国公報』と『時務報』に掲載されたものである。次に、蔡錫勇の『伝音快字』の信頼性が高い。梁と蔡爾康が、出版直後にその内容について言及している。

沈の『盛世元音』は、梁と沈が出版したと主張するものの、出版された本を見たとの第三者の記録は見当たらない。1950年代に倪が拼音文字資料をまとめたときにも発見されていない。

力の『閩腔快字』は、蔡の『伝音快字』を引き継いだもので、出版は、1896年の9月以降と考えるのが自然だろう。王の『拼音字譜』は自序で、「光緒22年仲秋」(1896年旧暦8月)と記しているが、推薦文である「拼音字譜序」では、翌年の光緒23年になっており、実際に出版されたのは、1897年以降と考えられる。

1892年に出版された、盧の『一目了然初階』の現存するテキストが、どこまで遡れるのかは不明である。許氏に確認したところ、木版は失われて現存しない、とのことだった。現在出版されているテキストは、1930年代に白が調査した際に収集され、1956年『拼音文字資料叢書』で復刻された際にも用いられたのではないかと、とのことであった。

盧のテキストは、1892年に出版されていたとしても、厦門のごく一部の人に知られていたのみで、中国全土に影響を及ぼすものでなかった。中国の知識人が受けた影響を検討するために、本章では、1895年7～11月の盧のテキストから検討して行く。

表1 言語教育に関する論説一覧

西暦	月	書名・論説題目	著者	備考
1892	6	『一目了然初階』	盧巖章	厦門で出版
1895	7	「変通推原説」	盧巖章	『万国公報』に掲載
	10	「変通推原第二章」	盧巖章	『万国公報』に掲載
	11	「三統変通推原説」	盧巖章	『万国公報』に掲載
1896	1	「同邑盧君切音字書後」	蘇易	『万国公報』に掲載
	2	「四読変通推原説」	盧巖章	『万国公報』に掲載
	8	『伝音快字』	蔡錫勇	武昌で出版
	9	「沈氏音書序」	梁啓超	『時務報』に掲載
	9	「盛世元音原序」	沈学	『時務報』に掲載
	10	「中国切音新字説」	盧巖章	『万国公報』に掲載
	?	『閩腔快字』	力捷三	武昌で出版
1897	1	「書盧巖章先生中国切音新字後」	林韜存	『万国公報』に掲載
	3	「節録致盧巖章先生第三函」	沈学	『万国公報』に掲載
	4	「書伝音快字後」	蔡爾康	『万国公報』に掲載
	5	『拼音字譜』	王炳耀	香港で出版
	5	「致沈学先生函」	林韜存	『万国公報』に掲載
	?	『六齋卑議』	宋恕	上海?で出版
1898	9	「奏請用切音」	林韜存	皇帝への上奏文

この表をもとに、1895年から1898年までの言説を次のように分類する。1895年に『万国公報』に掲載された盧の三つの論説、1896年に『万国公報』に掲載された盧の論説に対する反響、1896年に『万国公報』の外に出現した言語教育に関する言説、1897年に『万国公報』上で交わされた「新字」をめぐる議論と1898年の「切音新字」の上奏文である。

これらの分類をもとに、言語教育に関する言説の変遷と相互の関連を以下に検討する。

4.2 1895年「変通推原説」における盧憲章の言説

4.2.1 1895年7月「変通推原説」

盧は、1895年7月に掲載された最初の論説「変通推説」で、「切音文字を用いて国中の人人に読書をさせ、「精」にさせる」と述べる。

ここで述べられる盧の主張は、中国の振興のためには民衆を「精」にする必要があり、民衆を「精」にするためには「読書」が必要であり、「読書」をするためには「新字」が必要である、との内容である。

「精」とは、「苟」（おおまか、いい加減）と対立する概念である。盧は、実用的知識、西洋文明を「精」とし、儒教を「苟」とした。盧は、これらの概念を用いて、国家と民衆の関係について述べていく。

「国が振興するのは、「精」であるからであり、振興しないのは「苟」だからである。「精」とは、細微であることである。（中略）人は、（物事を）おろそかにしやすい。軽く考えて油断してはならず、物事の仔細を追求しなければならない。」

人は、ただ成長するだけでは「精」にはなれない。「理」を知ることにより、国家と民衆に利益を創りだすことが可能となり、国家が振興する、と説く。

「子供が言葉を話し始めるのを観察すればよい。一から十の数字などを知る事は、簡単である。しかし、（知識を）広げ充実し、その理を六合（天地東西南北）に広げなければならない。小さくは家庭や商売に必要であり、大きくは格致（事物の道理）と化学の要となる。これにより、新奇で巧妙な機器を生み出し、国と民衆に利益をもたらす千万のものを造り出すことができる。このように国は、期待されて振興するのではなく、自ら振興するのだ。」

盧は、このような「精」の概念で「儒」を否定する。盧は、「儒」が「苟」であり、いい加減で無用な存在だと強く批判する。

「苟の者は、これを浅はかだと言う。私たち儒者はこんなことを求めてはいない。深遠な太古のことを研究しているのだと。苟の者は、日常のあたりまえのことでも、口を開けばいにしへの聖人や王を引き合いにだす。志は大きく言葉は派手だが、無用なことを学び、いい加減なことに心を安んじ、やさしいことを捨てて難しいことを求め、近くのことにはぼんやりしている。これで国を振興しようとしても振興することはない。」

そして、「苟」と決別し、すべての民衆が「精」にならなくてはならない、と強調する。西洋文明を学ぶことは、洋務運動でも主張されてきたが、民衆すべてに西洋文明を学ばせるとの発想は、この時まで中国の知識人の間に存在しなかった。

「苟を捨て去り、精を選ばなければならない。君子が精でも家臣が苟ではいけない。官が精でも民が苟ではいけない。男が精でも女が苟ではいけない。老人が精でも子供が苟ではいけない。士が精でも農工商が苟でもいけない。」

この「精」になるために、読書をしなければならない。しかし、中国の漢字は難しいと盧は説く。文字の歴史と字体の変遷、文字の多さ、常用する漢字の数、そして常用する漢字の習得にすら十数年かかると述べる。その内容は、『一目了然初回』の「原序」と同一である。そして、再び「精」に言及し、士農工商の読書の必要性を強調する。「精」が血液のようにめぐれば、中国は強くなると訴えるのである。

「君子が頭なら、官僚は両手両足であり、民衆は体の各部である。精は血液である。君臣が精でも民衆が苟では、頭と手足が動いても、体が病に犯されているようなもので、血液がめぐらず、命令に従わない。(中略)血液がめぐれば、全身健康で強くなる。誠にこのようなら、中国が大きいこと、人民が多いこと、地の利に恵まれていることから、数年でくらべるものがないほど強くなるだろう。」

この論説には、「本館附志」として編集部の賛意を示すコメントが付けられている。盧の言語教育観は、プロテスタント宣教師を代弁するものであった。

「卑見では、中国人が文字を知り、読書するには、簡便な方法を求め、子供が入塾後、四、五年のうちに文章がわかるようにすべきである。時間を作り、役に立つ諸学問を求めることができる。盧君のこの説は、我々の心をえた。」

4.2.2 1895年7月「変通推原第二章」

盧は、7月に掲載された第二の論説「変通推説」で、「切音は漢文を助ける」と主張する。

盧はこの論説で、「切音新字」の導入が、漢字の文化と対立しないことを説明し、「切音字」が世界の趨勢であり、日本をはじめとする漢字文化に属する国々でも「切音字」が使用されていることを紹介する。そして、中国でも、台湾と厦門で教会ローマ字による教育が行われていることを紹介し、「儒」に入門を許されない「婦女童稚、凡夫俗子」でも教化を受けている、と主張する。

盧はまず、「切音新字」が、「俗」であり、高尚な漢字に及ばないと、中国の知識人に考えられていることについて述べる。

「もし切音新字を用いれば、我が国が卑俗なものになってしまうのではないだろうか、また切音新字は浅はかな俗語にすぎず、漢字の美しさをどうやって備えることができようか。」

この見解に対し、盧は、漢字は表意文字として、同音異義語の表示に向いており、文字の形態に意味があり、端的に多くの情報を伝えることができるという利点があることを認める。切音字では、これらの利点は失われ、漢字の美しさという第四の利点も損なわれる。

「もし切音字にするなら、言葉が長くなり煩わしい。漢字は、簡潔に内容を伝えることに利点がある。漢字の形は、極めて正しく、極めて整っている。(中略)切音字は、蟹のよような横文字にすぎない。豆もやしのようなものである。漢字は、正しく整っている。漢字は、このような四つの利点がある。文墨の国が、なぜ卑俗な文字に混じらなければならないのか。」

盧は、これらの「切音字」を「俗」とする考えに対し、一つ一つ反論する。同音異義語は、文脈を見れば理解できるとし、文字の形態については、漢字は四万余字あり、文字が造られてから現代に至るまで形態は時代によって変化しているとする。漢字は簡潔に内容を伝えると言うが、故事成語や熟語は、注解がなければ、初学者には決してわからない、と述べる。そして、蟹文字、豆もやしと揶揄されても、「切音字」の最大の利点は、読み書きの簡単さにあり、盧は、この簡単さが、実用に結びつくと訴える。

「漢文の美しいことが万国にまれである。美しいがゆえに、その難しいこともまれである。読書をして六、七年しても、一通の手紙をかけない。もし切音字を学べば、資質が愚鈍な者でも、三年から五年もかからずに、各種の書籍を読むことができる。聡明な者は、さらに書を著し、説を立てることができる。」

盧は、世界の中の中国という視点を導入し、「切音文字」が世界の趨勢であると主張する。朝鮮や日本などの漢字文化を持つ国々でも「切音文字」が使われており、中国の南部で既に広まりつつあると述べる。そして台湾と厦門では、すでに教会ローマ字が民衆に普及し、新聞や書籍が読まれていることを紹介する。

「私が住む台厦で言えば、キリスト教を奉じる男女の間で、切音字を知る者は、万人を下らない。よって切音字の聖会報と台湾報が発行されている。切音字で漢文の聖賢伝と天文、地理、格物、数学など種々の要書が翻訳されている。他の十八省でも通商と伝教が行われているところで、切音字を知る者が、どれだけいるかわからないほどである。これは切音字の勢いであり、万国で通行できるだけでなく、我が国においても行うことができる。」

切音字は、西洋の書籍だけでなく、中国の古籍を書き表すことができ、これまで儒教の教えの外にあった民衆をも教化でき、決して俗なものではないと結論づける。

4.2.3 1895年11月「三統変通推原説」

盧は、11月に掲載された第三の論説「変通推説」で、「日本留学、賢人を招く、切音字によって学校、新聞、図書館を振興し、強国となる」と主張する。

この論説で盧は、中国と日本の国力の差について検討する。国力の差は、民衆への教育

の差であり、日本は、20年来三つの施策に力を入れてきた。学校制度、新聞、図書館の充実である。この「大原」(根本)は文字にある、日本の47文字の「切音文字」があるとする。

盧は、まず、国土の広さでは三十分の一、人口では十分の一にすぎない日本に敗戦した原因を分析し、日本が明治維新から中国との戦争に備え、「変通」を行ったと述べる。「変通」の始まりは、使節団の派遣であった。そして、留学生の派遣、御雇い外国人の招聘を行い、学校、新聞、図書館などを通じて、西洋文明を導入してきたと訴える。

「客人が私に問う。日本の土地はわずかに中国の三十分の一であり、その人民はわずかに十分の一にすぎない。どうして、少数が多数に勝つことができたのだろうか。大人が子供にくだるようなものである。私は言う。それは多い少ないを問題とし、変通を知らないからだ。(中略)城が高く、堀が深く、砲台が堅く、戦艦の大砲が遠く飛ぶからではない。勇猛な兵士と豊富な糧秣があったからではない。変通し新政を行ったことにある。留学し、諸賢を招き、西洋の学校、新聞、書庫(図書館)の三大方法の端緒とした。」

盧は、学校制度について詳しく紹介する。まず日本のすべての民衆が初等教育で言語教育を受けることを強調する。学校教育が年齢とともに段階的に進み、物理、地理、歴史など教科教育に分かれることを紹介し、学校と身分上昇と国家に必要な専門家の育成との関係について解説する。

「試験に合格した者は、官からの賞金があり、合格しない者は、進級することができない。二十歳前後になるか、学力が到達した者は、上学に進学し、一つの専門を精密に学ぶ。その性質に近い官僚になることができる。すなわち政治の学である。将軍にちかいものは、水陸軍の学である。農務、工務、商務、医、法、製造、鉱務、電務、機器、翻訳、書図、測量、丹青(不明)、船政は、各専門を精密に行う大博士がおり、教育を掌握している。学者は空談をするものではない。」

盧は第二の戦勝の理由として、新聞を取り上げる。日本では、新聞により、国中に日々の新しい情報が伝えられ、国中で共有されている。日清戦争中、日本では婦人子供ですら

戦況を詳しく知っていたことを紹介する。

「西洋をまねた報（新聞）は、日報、七日報、月報、二か月報、季報、年報がある。今、報館（新聞社）は、三百余りある。電報があり、すばやく情報を伝達することができ、自動車で迅速に配達することができる。（中略）中日の戦も、我国の水陸将士の派遣、営壘の配置、糧秣の量、及び種々の虚実の状況、新聞に載らないものではなく、婦人子供に至るまで、知らないことはなかった。」

そして、盧は、第三の戦勝の理由として、書庫（図書館）を挙げる。書籍が一部の知識人に独占されるのではなく、身分の上下に関わらず誰にでも読めるようにしなければならないと説く。

「西洋をまねて書庫を作った。要衝にある大きな町、村には皆公書庫がある。学校は少年子弟を養成するのに対し、公書庫は富貴貧賤、男婦老少、養成しないものはない。人材の得失は、書庫の多少に関わるため、書庫の多少は、国家の盛衰に関わる。」

これらの三大政策を支えている根本は、文字にあり、日本人は、漢字を用いながら、教育にかかる時間が少ないと分析する。

「この種の切音字を習えば、わずか数日で、教師がいなくても、自分で読んで自分で音声を切りとることができる。故に、男婦老幼、文字を知らない者がいない。（中略）初学では、日本字と漢字が混ざった書を学ぶ。漢字の傍には、皆日本の切音字の注がついている。初学者は漢字を知らなくても、漢字の傍の注の切音字をみれば、教師がいなくても自分で読むことができる。新聞書籍を婦人子供でも読めるだけでなく、理解できるのは、この点による。」

4.3 1896年『万国公報』で共有された民衆への言語教育観

『万国公報』編集部は、1895年7月の盧の「変通推原説」に対し、文末に賛同の意を表した。この当時、すでに広く中国の知識人に読まれ、大きな影響力を持っていた『万国公報』の支持を得たことで、盧の主張は中国の知識人から大きく注目されるようになる。

4.3.1 蘇易（1896.1）「書同邑盧君切音字書後」

1896年1月には、盧の主張に賛同する読者からの投稿が掲載されている。投稿者は、「同安蘇易」という人物で、盧と同郷の者である⁹⁶。蘇は、鉄道の建設や鉱産を興して富国強兵を目指すことを論じる者が多いなか、民衆への学校教育と文字による富強を論じるのは見たことがないと述べる。

この「書同邑盧君切音字書後」の後にも、「公報館志」として、「同安県の盧君が著した変通推原説は六、九、十月の公報に掲載したのち、続きが未だに寄稿されない。もし続編が来たなら、ぜひ掲載したい。」とのコメントがつけられている。

4.3.2 盧戇章（1896.2）「四読変通推原説」

蘇の投稿が掲載された翌月の2月、盧の第四の論説である、「四読変通推原説」が掲載される。盧は、まず次のように中国のおかれている国際情勢を述べ、危機感を煽る。

「海禁が開かれてから、我が国は大国の間で切迫している。東に日本があり、我が琉球と高麗と台湾を取っている。西に欧州があり、イギリスが我が香港とミャンマーを奪い、フランスが我がベトナムを奪い、我がシャムに迫ろうとしている。北にロシアがあり、黒龍江から徐々に侵入しようとしている。」

そして、「鉄路を造り、電線を通し、戦艦を購入し、砲台を築き、鉱産を開き、製造を起して自強を説く者は多いが、文字と学校を説く者はいない」とし「物には本と末があり、大綱がなければ小さなことはできない」と述べ、「切音文字を創設し、文教を起すことが、変通の根本である」と述べて、これまでの主張を繰り返す。

世界の文字文化、中国の文字文化に言及し、「切音字はあまねく天下万国の公理である」とする。Richardの『七国新学備要』を引用し、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本の小学校の予算を詳細に紹介し、中国も初等教育の予算をかけるべきだと主張する。

この「四読変通推原説」は、前に比べると長文だが、基本的な主張の要旨は変わっていない。『万国公報』に掲載された論説やRichardの書物の引用が増えており、編集部や読者を意識し始めている。

⁹⁶ 蘇易についての詳細は不明。

4.3.3 盧戡章（1896.10）「中国切音新字説」

10月に「中国切音新字説」で、盧は、「中西同志諸君」からの手紙が続々と寄せられていることを紹介する。26歳から43歳の今に至るまで昼夜を問わず苦勞して「切音新字」を創作してきたことを述べて、「切音新字」が最も早期の「新字」であることを強調する。そして、近日中に「北京腔之新字」を作成し「中西同志諸君」に報告すると述べている

この「中国切音新字説」では、すでに他の「新字」の存在が意識されている。この直前に、『万国公報』の外で「新字」をまねようとする動きが出現したのである。記事自体は短く、現在、内外から注目されている「切音新字」は、盧が早期から取り組んできたものであることを伝える宣伝文であった。

4.4 1896年『万国公報』の外に共有された民衆への言語教育観

1896年になると『万国公報』上だけでなく、その外にも、民衆への言語教育を述べた言説が現れ始める。最も早期の言説が、8月に出版された蔡錫勇の『伝音快字』であり、最も影響力を持った言説が、9月に『時務報』に掲載された梁啓超の「沈氏音書序」と沈学の「盛世元音原序」である。

ここでは、『万国公報』から、これらの動きを位置づけてみたい。

4.4.1 蔡錫勇（1896.8）『伝音快字』

1896年に『伝音快字』を出版した蔡錫勇（1847-1897）は、福建省龍溪に生まれた⁹⁷。広州同文館の第一期生として、英語などの外国語を学んだ⁹⁸。北京同文館を経て官職につき、1875年から陳蘭彬（1816-1895）に随行して、アメリカ、日本、ペルーに赴任する。帰国後は、張之洞（1837-1909）に重用された。張は、洋務運動の中心人物の一人である。張は、1889年から湖広提督として武昌に赴任してからも、鉄道や軍備の近代化に努めていた。1895年ごろ、蔡は張のもとで、外国の書籍の翻訳を行いながら、張が1893年に設立した自強学堂の「総弁」を務めていた。

蔡は、『伝音快字』の「自序」で、まず陳蘭彬に随行し、アメリカ、日本、ペルーを訪れたときのことを述べる。ワシントンには4年間駐在したが、議会や訴訟において、聴衆

⁹⁷ 蔡の経歴については、黄（2005）69頁を参照。

⁹⁸ 広州同文館の設立は1864年。

に向かって演説するのを見た。その際、専門の筆記者が「快字」で、演説の内容を記録しているのを知った。口述に合わせて、手が動き、毎分 200 文字以上を書くことができる。西洋の文字はもともと簡単だが、これはさらに簡単だと述べる。

蔡は、この後、中国の文字について述べるが、その内容は盧の言説と酷似している。

「中国の文字を学ぼうとすれば、最も美しさを備えているが、同時に煩わしく難しい。倉史以降、文字は増え続け、字典に収録されている字は、4 万余字になる。士人が一生読書しても、全てを知ることができない。(中略) 通常使用するのは 3000 足らずである。四書には、異なる文字が 2300 字があり、五経十三経にはさらに 2000 余事を追加される。子供が髪を束ねて入塾して、学業をその業を修めようとしても、賢い者でも十余年を経なければならぬ。」

話し言葉と書き言葉に関係に言及し、西洋のローマ字の簡便さと民衆の識字率の高さを強調する点も、盧の言説と同一である。

「文字と言語はそれぞれ別であり、読書をして字を知るには、その文を習い、努力して暗誦し、多くの月日をかけなければならない。西洋はローマ字を用いる。各国の読音は異なるが、皆切音を主としているので、通常の言語は、この方法を組み合わせて行う。(中略) 文字をなすのに、上から下まで、男から女まで、学ばない事は無く、学ばない人はいない。」

蔡の「自序」から、蔡の言説が、盧の言説から強い影響を受けていることが読み取れる。蔡は「自序」初めで、ワシントンで見た演説と速記が原点にあると述べる。演説という「声」と記録としての「文」をつなぐ存在として、「快字」を知った。蔡は、「快字」を文字通りの速記用の文字としては使わず、教育用の文字として使用することを提唱した。この発想の転換は、盧の影響を受けたものではないだろうか。

蔡は、科挙を経ていないため官位は高くない。しかし、清朝の正式な官吏であり、外国語の専門家であった。アヘン戦争後に重要となっていく外交と教育分野において、長年最前線にいた。西洋をまねて、表音文字で近代化教育を行うとの盧の論説は、蔡を強く刺激したと考えられる。

蔡は、盧の論説について、直接言及していないため、彼が盧の論説を読んだかどうかは確定できない。しかし、内容が類似する点、盧の言説の掲載から約1年後に発表されたという状況のほか、『伝音快字』の巻末に収録された「伝音快字書後」で、湯金銘という人物が、盧の論説について言及している⁹⁹。したがって、蔡が盧の論説を読んでいた可能性は高い。

湯は、蔡の「快字」を推奨した後、盧が単に論説の発表をするのにとどまり、文字案を体系的な書として出版していないことを批判する。

「最近、厦門の盧君が、文字を振興の根本と言っている事が報じられた。音をもって字を創り、身分の低い人にも習わせると考えている。論説は万言に及ぶが、その書はまだ見ていない。」¹⁰⁰

4.4.2 梁啓超 (1896.9)「沈氏音書序」、沈学 (1896.9)「盛世元音原序」

『万国公報』の外で出現した、第二の民衆への言語教育観を述べた言説は、梁啓超の「沈氏音書序」と沈学の「盛世元音原序」である。この二つのテキストは、1896年9月に『時務報』に掲載された。

ここで、まず『時務報』の重要性について確認しておきたい。『時務報』は、同年8月に上海で創刊したばかりで、この二つのテキストが掲載されたのは、第四冊である¹⁰¹。『時務報』は、創刊後間もない新聞だったが、すでに1895年に北京の『万国公報』(1895年8月)と上海の『強学報』(1896年1月)が発行されており、改革を目指す朝廷内外の中国の知識人の注目を集めていた。

『時務報』の主筆は梁が務めていた。「報」を発行する「時務報館」の総経理(社長)は汪康年(1860 - 1911)で、設立の資金は、『強学報』を発行していた資金の残りと黄遵憲(1848 - 1905)から提供された¹⁰²。汪は、張之洞の武漢における幕僚であり、張は、『強学報』を発行していた政治団体「上海強学会」(1896年1月)に資金を提供していた。1896

⁹⁹ 湯の詳細については不明。

¹⁰⁰ 湯金銘(1896.8)「伝音快字書後」、拼音文字史料叢書(1956)『伝音快字』北京：文字改革社75頁に収録。

¹⁰¹ 第一冊から第四冊までは、10日ごとに発行されている。

¹⁰² 丁(2004)105頁

年は、『時務報』を軸に、張らの洋務派、康有為、梁らの変法派らが糾合され、改革の方向性についての具体的な討議が始まった年だったのである。

『時務報』はこの後、孫文（1866-1925）らの「興中会」（1894年設立）と接近するなど、他の改革派にも影響を与えるようになる¹⁰³。変法派のジャーナリズムは、マカオの『知新報』（1897年創刊）や長沙の『湘報』（1898年創刊）などに拡大を続け、中国全土の知識人に影響を与え、変法運動の思想的基盤を創りだす。このジャーナリズムの読者には、清朝の崩壊後、民国期から建国期に向けて中国の近代化を担っていく、若い知識人たちも多くいた。

沈学の『盛世元音』は、書籍そのものよりも、このような改革運動の中心にあった『時務報』で紹介されたことのほうの意義が大きい。梁啓超が書いた序文が、新たな言語教育観の存在を読者に知らせたのである。

先行研究の「文字改革」に関する文脈では、沈の「元音」に焦点が当てられていた。しかし、本研究では、梁が、『時務報』で、民衆への言語教育を訴えたことを重視すべきだと考える。

梁の「沈氏音書序」は、民衆が国家の構成員であり、その教育の程度によって、国家の強弱が決定される、という教育観を中国各地の知識人に推し広げた。この教育観はやがて、民衆の教育のためには、学校、教師、教材、そして国語が必要であり、表音文字による言文一致、言語統一が実現されなければならない、という民国期の国語運動につながっていく。この文脈においては、梁は、国語運動の創始者であった。

梁の「沈氏音書序」における言説について、以下に検討する。

梁は、まず民衆と国、読書と文字の関係について規定し、西洋列強、日本と中国の識字率の違いを紹介する。

「国が強いかどうか、民衆に智があれば国は強い。民衆に智があるかどうか、天下の人々が文字を知り、読書をすれば、民衆に智がある。（中略）ドイツとアメリカは、100人中字を知る者が96、7人であり、西欧諸国は総じてそのようである。日本は100人のうちで80

¹⁰³ 『梁啓超年譜長編』によれば、興中会と康有為一派との合作は、1899年に行われるが、その源は、1896年に始まるという。丁（2004）、118頁

人余りである。中国は、文明をもって五州に号するが、100人のうちで字を知る者は30人に満たない。」

梁は、中国の識字率の低さについて、伝統的な「言」と「文」の対比から次のように分析する。

「なぜこのような状態なのだろうか。我が故郷の黄君（黄遵憲）が言うには、言語と文字が離れているので、文章に通じる者が少ない、ということである。言語と文字が一致すれば、文章に通じる者が増えるだろう。中国の文字は多い。多くの文字にはいくつかの音がある。よって審音も難しい。ある一つの音もいくつかの漢字がある。よって字を選ぶのも難しい。ある文字は十数の画数がある。よって字を知るのも難しい。（日本国志三十三）ああ、華民で字を知る者はまれである。このままではいけない。」

梁は、言文の不一致について、「質」（実質）と「文」（文化的）に分けて分析する。

「天下には二つの理がある。一つは質、一つは文である。文は、見た目は美しいが実用的ではない。質は、実用的だが見た目は美しくない。中国文字は形に偏り、学識に通じた人、博士が、注釈をつけたり、詩文を書いたりするのに向いている。文家の言葉である。外国文字は音に偏り、婦人や子供が、日常の生活に用いるのに向いている。質家の言葉である。この二つは対になっており、まじりあったり、どちらかが消えたりするものではない。」

梁は、中国の文字の歴史を振り返り、文と言の乖離は大きくなる一方だと述べ、再び西洋に目を向ける。西洋も同じような状況だったが、これを改めた。中国も習うべきだと訴える。

「西洋人はギリシア・ラテン文字があり、上流の人々は古い本を読むことができ、イギリス、フランス、ドイツには、各国の方言があった。（中略） 声を形にし、文を改めるのは、世界の一大事である。」

梁は、教育のために、文字と言葉を一致させようとする動きが、中国国内ですでに行われていることを詳細に紹介する。

「私がこれまで聞き及んでいるのは、劉繼莊氏、龔自珍氏である。しかし、今に伝わっていない。わが師南海康長素先生は、子供が初学で学ぶ音声は天下みな同じであり、十六音をとって母（音）とした。凡例を作り、その子供たちの為にこれを編纂した。私はまだこれを見ていない。朋輩の中で、湘郷の曾君重伯（曾國藩）、錢塘の汪君穰卿（汪康年）、みな志があっても、完成しないまま時間が過ぎてしまった。『万国公報』で、厦門盧巖章が数千言にわたって自ら述べるのを見た。また、達県呉君鐵樵から、蔡毅若の快字を見せてもらった。」

梁は、古えの学者や自身の属する改革派の人物を挙げたうえで、盧と蔡を位置づける。そのうえで、このような動きに賛意を示し、喜ばしいことと評する。

「私は万国の文字について、全く知らない。音韻の学については、未だ試した事はなく、全くわからないので、諸君のほうが長じているだろう。しかし、内心喜んでいる。この後我が中土文字は、文と質の両統が、偏りがなくなり、文と言が合となり、読書識字の賢い民が日に日に増えるだろう。」

そのうえで、沈学の『盛世元音』の紹介へと移る。

「沈学は呉の人で字（あざな）が無い。西洋の文に深く通じ、論理と原理（名理）を研究し、19歳で書を著した。5年前に書を成し、名を盛世元音という。そこで言うには、18の字母で天下の音を切り取る事ができる。その技を学ぶには半日で通じることができる。その簡易さは、五大部洲の全ての文字を上回る。」

沈の方法は、5年前に書になっており、「五大部洲の全ての文字」より優れている。盧や蔡のものに比べても優れていると訴える。

「盧君の方法は古臭く、劣っているものである。私が言うのに、蔡君の方法は、書くのは細かかったり荒かったりに分かれ、実用に適さず、方法も精密でない。やはり、劣っているものである。私は盧君の書を未だに見ていないが、蔡と沈の二人の方法は、だいたい同じであり、西洋人から出ている。沈君の案は、より聡明で、推薦する事が出来るだろう。」

以上の梁の言説を見ると、盧の「精」を「智」に置きかえただけで、民衆への言語教育、という内容では、異口同音であることがわかる。しかし、梁は、盧の言語教育観には一切触れず、民衆への言語教育を実現させる「方法」として、古いと批判する。文字案としては三番目にあたり、後発だったの沈の文字案を優位に立たせるためだった。

梁は、自身の言語教育観の着想を、黄遵憲の『日本国志』から得たと言う。黄遵憲は、広州で生まれ、1877年に挙人となった官吏である。初代駐日公使となった何如璋（1838-1891）の参贊官（書記官）として、日本に4年間滞在した。日本の国情を調査した『日本国志』は1887年に完成し、日清戦争以前の1890年に李鴻章、張之洞らに提出された。しかし、それは重視されることなく、『日本国志』が広く読まれるようになったのは、日清戦争後に出版されたことによる。

黄と梁が知り合ったのは、1896年4月であり、『時務報』の創刊にむけて準備を始めたころである¹⁰⁴。この時、すでに梁は盧の論説を読んでいた。黄の『日本国志』は、『万国公報』とは別の経路で、民衆への言語教育観を中国に紹介したものとして重要であるが、この時点で黄は言語教育の必要性を主張しておらず、黄の言語教育観が梁に影響を与えたとは考えにくい。

梁は、中国で民衆への言語教育を行っている人物として、劉繼莊、龔自珍、康有為、曾國藩、汪康年を挙げている。劉繼莊は清初の儒学者劉猷廷（1648-1695）を指す。『新韻譜』を著し、音韻を研究したが、民衆への言語教育とは全く関係がない。龔自珍（1792-1841）も考証学の大家段玉裁（1735-1815）に連なる学者だが、やはり民衆への言語教育とは直接の関係はない。康有為と汪康年は、『時務報』の関係者であり、曾國藩（1811-1872）は太平天国の乱を平定した同治中興（1862-1874）の功臣である。

梁は、社会文脈の全く異なるこれらの人物を繋ぎ合わせ、民衆への言語教育観が、自らの属する改革派にはるか以前から存在していたかのような印象を読者に与えようとする。

¹⁰⁴ 同 104 頁

これらの人物が、実際に民衆への言語教育を考え、実行していたことは、梁の言説以外に、客観的には確認できない。

梁は、民衆への言語教育という、中国の伝統的な統治思想を覆す考えを、『万国公報』の盧の言説から知った。しかし、盧は北京や上海の知識人の間で全く無名あり、「文童」に過ぎない盧から影響を受けたことを公言するわけにはいかなかった。梁は、改革派の人々の中で、最も若いメンバーの一人だったが、中央の官僚になることのできる挙人であり、知識人たちの間でも、改革を文筆でリードする存在として注目を集めつつあった。

しかも、『時務報』創刊の経緯と『万国公報』の間には、複雑な関係があった。梁は、改革案の着想を『万国公報』から得ていながら、そのことを公言できない理由があった。

4.4.3 北京『万国公報』（1895）

ここで、日清戦争直後の1895年に遡り、梁啓超と『万国公報』の関係について検討し、梁が改革のための具体的な政策の着想の多くを『万国公報』から得ていたことについて論じたい。

『梁啓超年譜長編』に記されている1895年の梁啓超の行動は次の通りである。

3月、梁は、23歳で北京に入り、会試を受験する¹⁰⁵。

5月、日清戦争の講和を聞き、康有為はそれに反対する挙人を糾合した。1200人余りの連署を集め上書を都察院に差し出す¹⁰⁶。梁は汪康年らと新政について手紙で語る¹⁰⁷。

8月、康有為が発起人となり、強学会を発足させる。袁世凱らが参加。『万国公報』を刊行する¹⁰⁸

8月に強学会が刊行した『万国公報』について、康有為は次のように述べる。

「変法の本源は、北京より始めるのでなければダメ、王公大臣より始めるのでなければダメ、であった。そこで京報の配達人と相談して、『万国公報』を毎日一千部印刷し中央官

¹⁰⁵ 同 82 頁。清末の科挙では、会試に合格すれば、会試覆試を経て、最終試験の殿試へと進む。会試は、合格率2%前後の難関の最後の試験。

¹⁰⁶ 同 84 頁

¹⁰⁷ 同 87 頁

¹⁰⁸ 同 90 頁

僚に送付することにした。紙代や墨代（インク）の銀二両は自ら負担し、卓如（梁啓超）や孺博に日々文章を書かせ、学校・軍事・政治の各類に分けた。毎日のように朝廷に伝え送り、中央官僚に配布したが、代金は取らなかった。官僚たちは日々、それまで知らなかったことを知るようになり、その知識や議論はかくて一変した。」¹⁰⁹

また、梁啓超は次のように述べる。

「後孫公園に会所を設立し、上海から数十種の訳書を購入いたしました。そうして報を出すことが私にまかせられたのです。当時もとより機械を購入する資力はなかったし、また北京にそんなものがあると聞いたこともない。そこで京報の販売所にたのんで粗末な木版で印刷してもらい、『中外公報』と名づけて毎日一枚ずつ発行したのであります。」¹¹⁰

ここで、発行された雑誌の名前が、康と梁で異なることに注意したい。中国の学会では、北京で発行されたこの雑誌と、上海のプロテスタント宣教師が発行する『万国公報』とを長年同一視してきた。北京の梁らの発行する『万国公報』に、疑問を抱いたのは、若杉（1996、1998）である。若杉は、この問題に関して詳細な調査を行い、この新聞が、上海の『万国公報』の編集部が無許可で、変法派が勝手に転載・発行したものであることを明らかにした。島田虔次らによる『梁啓超年譜長編』の日本語版も若杉の研究を踏襲している¹¹¹。

この問題については、宣教師側の記録が信用できる。Richardは、中国での滞在生活を綴った*Forty-Five Years in China*の中で、広学会の出版物の海賊版が広く出回っていることに言及した後で、次のように述べている。

「北京では、1895年から1896年にかけての冬、戊戌変法の最初の数か月に、改革クラブが新聞を発行し始めた。Allen博士の『万国公報』上で発表した文章を印刷しただけでなく、新聞の名前も同じだった。」¹¹²

改革クラブとは、康有為、梁啓超らの強学会を指す。Richardは、1895年10月、初めて康

¹⁰⁹ 同 88 頁

¹¹⁰ 同 89 頁

¹¹¹ 同 343 頁

¹¹² Richard (1916), pp.234

有為と北京で会見したとするが、強学会について、次のように述べる。

「康有為と彼の友人たちによって設立された変法維新の協会は、「強学会」（高級学会）と称した。その構成員は、北京の最も学問がある翰林だけでなく、都察院の監察官と内閣の下級文官もいた。」

そして、『万国公報』が、転載（reprint）されていたことに言及する。

「初めのころ、彼らの新聞の内容はすべて私たちの刊行物から転載したものだ。唯一異なっただのは、我々の新聞が上海で金属の活字で印刷したのに対し、彼らは政府の『京報』が採用する木版を採用したことだった。このことにより、表面上は、政府機関報と同じになった。しかし、内容上は、広学会の宣伝する西洋の観念を紹介していたのである。」

113

若杉の調査によれば、Richardが手に入れた北京の『万国公報』に、「混同を防ぐために私が改名を提案して以後、変更された」との、Richardの名が記されたメモが残されているという¹¹⁴。

Richardにとっても、無許可の転載とはいえ、『万国公報』の記事が朝廷の官僚たちに読まれることは望ましいことだった。事後的にでも、変法派の新聞を認めることにより、朝廷内に影響力を持つことができる。Richardは、『中外紀聞』と改名された新聞の顧問となる。梁らにしても、Richardというブレインは得難いものだった¹¹⁵。

以上の経緯から、梁は1895年当時『万国公報』の記事をくまなく閲覧していたことは、疑いの余地はない。翌年の梁の「沈氏音書序」で示された言説は、『万国公報』上の盧の言説の影響を強く受けたものだった。

異なるのは、盧が民衆を「精」にすることにより、国家が強くなると論じたのに対し、梁はそれが民衆の「智」にあるとした点である。また、民衆への言語教育が、外来の思想であると同時に中国にも古くから存在していたかのような歴史観を創出した。さらに、沈の優位性を強調するために、文字案の優劣を競った。

¹¹³ 同 254 頁

¹¹⁴ 若杉（1998）139 頁

¹¹⁵ 若杉（1998）、146 頁

このことは、盧の主張を変形させて、中国全土に伝えることとなる。盧は、国家の富強のためとの点で、プロテスタント宣教師の言語教育観と異なっていたが、プロテスタント宣教師と同じく、学校、新聞、図書館など近代的な教育政策のなかで言語教育を位置づけていた。梁の主張では、民衆の知識と読書という中国の伝統的な教育観に後退している。梁が文字案の優劣に固執したことは、清末に多くの文字案を生み出すことにつながった。

梁は、北京の変法運動を、上海のプロテスタント宣教師に認めさせ、協力を取り付けた。しかし、このことは、彼が『万国公報』の代弁者になったことを意味しない。康有為と自分自身が改革運動の主導権を握るために利用したにすぎない。

「沈氏音書序」では、『万国公報』に書かかれた民衆への言語教育観に全く触れず、それとは別に、中国ですでに民衆への言語教育に取り組んでいる人物がいたかのように装う。それらの人物は、梁の属する派閥の関係者ばかりである。梁が、改革運動において、自派の地位を固めようとしていた傍証として、「公車上書」について挙げておきたい。

「公車上書」とは、康が、日清戦争の講和に反対する挙人ら1200人余りの連署を集め、上書を都察院に差し出したが、拒否された事件を指す。この「上清帝第二書」と呼ばれる意見書は、台湾の民を「棄民」することを批判し、「変通」によって朝廷を改革すべきだと訴える¹¹⁶。そして、「天下には民衆が多いが、士は少ない。民衆は学問をしないので、農工商に人材はいない」と述べる。「西洋の富強の理由を考察すると、大砲や機械などの武器ではなく、理をきわめ学問を勤めることにある。西洋では七、八歳から皆学校に入学し、入学しない者は両親が責任を迫及される。よって郷塾が甚だ多く、各国の読書できる識字者は、100人中70人になる。」と、言語教育の重要性を訴える。

この改革運動の出発点とされる「公車上書」の存在について、中国の学会から強い疑義が提出されている¹¹⁷。

茅海建（2005）によれば、1970年代から研究者の間で、「公車上書」を巡る史料の矛盾が指摘されていた。茅は改めて史料を検証し、次の理由から、康有為の「公車上書」の存在を否定する。

- 1) 都察院は、「公車上書」がなされた時期に他の「上書」を受け取っている。
- 2) いくつかのグループが「上書」を提出したが、康有為がこれを代表したことを示す客観的な史料がない。当時の康の地位を考えれば、彼が運動を主導するのは不自然である。

¹¹⁶ 康有為「上清帝第二書」、『戊戌変法』（二）、上海人民出版社（1972）131頁に収録。

¹¹⁷ 『梁啓超年譜長編』の日本語版も、康の「上書」の存在を疑う。342頁

3) 「公車上書」の存在を示す史料は、康の自伝である『康有為自編年譜』と弟子が上海で出版した『公車上書記』と『南海先生四上書記』しかない。

4) 「公車上書」には、当時知り得ない情報が掲載されており、関係者の残した史料間でも、看過できない矛盾がある。

日清戦争の屈辱的な講和内容を知って、北京にいた科挙受験生の間で動揺が興り、いくつかのグループが朝廷に上書を提出しようとした。しかし、康がその中心で、運動を組織していたとは考えにくい、と茅は結論づける。欧陽躍峰(2002)は、1900年前後、さまざまな派閥に分かれようとしていた変法運動で、康が指導的に地位にあったことを明確にするために、このような記録の操作が行われたと述べる。

「公車上書」で提出されたとされる「上清帝第二書」のテキストが、どこまで遡ることができるのか不明である。ただし、内容を検討すると、言語教育観に関する箇所は、1895年5月という時期をみても、あまりにも完全な内容である。1895年5月に康と梁が知り得た情報を超えている。また1896年の「沈氏音書序」で、梁は、康らが早くから言語教育に関心を寄せていたことに言及するが、「上清帝第二書」について全く触れていない。「上清帝第二書」は、1896年の時点で、言語教育において先行していたことを示すのに有効な文書なのに、梁がそのことに触れないのは、不自然である。

4.5 1897年「新字」の主導権を巡る争い

1896年、民衆への言語教育観は、『万国公報』上だけでなく、蔡の『伝音快字』や梁の『時務報』にも波及し、全国の知識人の関心を集めるようになった。盧の主張は、文字案そのものではなく、総合的な近代教育制度の中での「切音新字」の必要性を説くものであった。しかし、運動が波及する中で、誰がどのような「新字」を創るのか、との点に関心の中心が移っていく。

その兆候は、盧自身の言説にも現れているが、蔡、梁によって強調されていく。そして、1897年になると、『万国公報』上で、林韜存と沈学、蔡爾康(1851-1921)の間で「新字」の主導権を争う投稿が掲載される。

1897年1月に掲載された林韜存の「書盧巖章先生中国切音新字後」では、まず林は盧の論説に賛同する考えを示す。そして、盧が考案した「中国切音新字」は、わずか60余文字で中国各省の方言を切り出すことができ、ローマ字より優れており、簡便であると述べる。

『一目了然初階』で掲載された「中国第一快切音新字」では、すでに厦門方言を表記する

36 文字に加えて、泉州と漳州の方言を表わすための 10 文字を加えた 46 文字が使用されているとし、今、官話を表わすための文字を作成しているとする。林は、この後 1898 年に盧の「切音新字」を皇帝に上奏することとなる。

これに対し、3 月に掲載された「節録致盧戇章先生第三函」で、沈学は、盧への競争心を露わにする。

沈は、自らの創製した「元音」は 18 画で五大洲の方言を表わすことができ、もしこれより優れた方法があれば、洋銀三千元支払うと言う。そして、盧に意見を聞くために、盧に手紙を二通出したが返事がないので、『万国公報』にこの三通目の手紙を送ったと述べる。

沈は、「格致音律」（近代的な音韻学を指す）と「古今字法」（古代と現代の表音法）に通じた者がいないことを嘆き、盧の言説ばかりが注目を集めていることを批判する。そして、「元音」が、音韻学的にいかに優れているかを説く。

この翌月 4 月には、蔡爾康の「書伝音快字後」が掲載される。蔡は科挙に失敗した後、ジャーナリズムに身を投じた知識人の一人で、この時、『万国公報』で中国語の主筆であった。蔡は、「西洋は声を文字にしている」という、すでに共有された教育観を述べた後、盧、沈と蔡を比較し、同郷で同姓の蔡錫勇の書を推薦すると述べる。

さらに翌月の 5 月、「怡園小主人」という人物による、沈の手紙に向けた返事「致沈学先生函」が掲載される¹¹⁸。わずか 3 行で、盧の「切音新字」が最も早くから行われてきたことを述べ、もしこれより早く書かれた書があれば申し出るように求める。

これを最後に、『万国公報』上での「新字」を巡る争いは終わる。沈学は、その後も『知新報』や『申報』などで宣伝を行うが、1900 年ごろには落剥し、困窮のなかで亡くなる。

4.6 1898 年「切音新字」の上奏と変法運動の挫折

1898 年 6 月、光緒帝は「明定国是」の詔書を下し、変法が始まる。改革を求める数々の上奏が行われるなか、盧の「切音新字」も林輅存を通じて上奏され、皇帝からの上諭が下る。

しかし、わずか 3 か月後に変法は失敗し、康は Richard の助けで上海を経て香港へ逃亡し、梁は日本大使館の助けで王照（1859-1933）とともに日本へ亡命する。黄遵憲、林輅存は官職を解かれ、汪康年も清朝から追捕される身となる。盧、沈らは、清朝から罪を問われるほど重視されておらず、それぞれ廈門と上海で逼塞する。蔡は 1897 年に病没していた。

¹¹⁸ 黄（2005）は、「怡園小主人」を林輅存だとする。83 頁

変法運動は頓挫するが、張之洞らは朝廷に残る。清朝は、1902年から日本を模して学校制度の導入を図り、1905年に科挙が廃止される。民衆への言語教育と初等教育の普及は遠ざかり、西洋文明の移入をめざした国家的人材養成のための学校制度が導入された。

しかし、改革をめざす中国の知識人の間では、民衆への言語教育によって中国を改革する、という意識が広く共有されていった。

1931年に出版された民国期の『最近三十五年之中国教育』では、小学校や中学校の学校教育、新文化運動、そして「国語運動」などの中国の近代教育の幕開けを1895年としている。1895年を起点とした理由の一つとして、康有為らの「公車上書」を挙げている。「上書」の史実としての存在の有無はともかく、民国期の知識人に対して、康と梁が与えた影響は大きかった。

4.7 本章のまとめ

本章では、『万国公報』を軸に、1895～1898年の言語教育に関する言説を時系列にまとめ、中国の知識人の中にどのように広まり、共有されるに至ったかを解明した。

中国の知識人に、民衆への言語教育の重要性が認識されるきっかけになったのは、1895年、『万国公報』に掲載された盧の三つの論説である。『万国公報』は、当時日清戦争の敗戦を乗り越えるための具体的な改革案を提案し、中国の知識人の注目を集めていた。この『万国公報』に掲載されたことは、盧の主張を一躍全国的なものにした。

1896年になると、蔡の『伝音快字』など、『万国公報』の外で「新字」を巡る議論が起る。『時務報』の主筆として、改革をめざす知識人の中で注目されていた梁啓超がこれに加わることにより、民衆への言語教育の重要性は、改革派の知識人の中で広く共有されることになる。この過程で民衆への言語教育の議論は、漢字に代わる新たな文字規範の議論として認識される。プロテスタント宣教師と盧は、表音文字である「新字」を民衆への言語教育の一部として考えていた。しかし、梁は、中国の伝統的な言語観である「言」と「文」から「新字」を新たな文字規範と認識し、その主導権を握ろうとした。梁は、清朝の改革案の多くを『万国公報』から得ていたが、改革運動における自らの地位を優位にするために、それを公言しなかった。梁は、民衆への言語教育の重要性に気づいたのも自らの派閥であるかのように装った。

1897年には、『万国公報』上で、盧、蔡、沈の「新字」が優劣を競い、主導権を巡って議論が交わされたが、1898年に変法運動は頓挫し、「新字」を巡る争いはいったん終える。

1898年までに、民衆への言語教育は制度として実現しなかったが、民衆への言語教育観は中国の知識人に広く共有され、民国期の「国語運動」へとつながることになる。

結論

本研究は、まず第一章で、先行研究における盧戇章の評価の変遷の検討を通じて、中国の言語教育の史的研究に存在する言語発達史観を解明した。「国語運動史」は、未成熟な「切音字運動」から近代的な「国語」へと発達していくとの史観の中で、清末の言語教育を記述した。実際には「言文一致」、「言語統一」という中国語の近代化の基本思想は、清末にすでに中国の知識人の間で広く共有されていた。それにもかかわらず、「国語運動史」は、清末の言語教育を未成熟なものとするにより、民国期における「国語運動」の先進性を示そうとした。

第二章では、プロテスタント宣教師が民衆への言語教育を行い、宣教師の言語教育観が、『万国公報』を通じて、各地の知識人に広がっていった過程を描き出した。

1850年代に、中国にやってきたプロテスタント宣教師は、当初、布教のために、中国の民衆の言語を外国語として研究する。そのために、地域ごとで異なる方言をローマ字で記述する方法を研究し、地域語の辞書の編纂、聖書の翻訳、出版と印刷などを行った。やがてプロテスタント宣教師は、これらを応用して、民衆に言語教育を行おうと試みる。これにより、中国に初めて、民衆を言語教育の対象とみなす考えが持ち込まれた。

一方、清朝と改革を目指す知識人は、1860年代から西洋の機械文明を移入することによって、西洋列強に対抗しようとしていた。この中には、民衆に近代的な教育を行うことは含まれていなかった。1894年に日清戦争が始まると、ジャーナリズムによって両者の領域が交わるようになる。上海のプロテスタント宣教師が発行する『万国公報』は、戦況の移り変わりを伝え、評論によって分析することにより、中国の知識人の関心を集めるようになる。

第三章では、盧戇章によって、民衆への言語教育が、国家の富強と結びつけられこと、中国の言語は、「言」と「文」が不一致であり、漢字が難しすぎるために学校教育に適さないことが指摘されたことを確認した。この盧の言説は、1895年以前は注目されていなかったが、『万国公報』に掲載され、中国の知識人によって再生産され、共有されるようになる。

第四章では、『万国公報』に掲載された盧戇章の言説をきっかけに、民衆への言語教育観が、中国の知識人の間で再生産され、共有されていった過程を解明した。梁啓超は民衆への言語教育観を、中国全土に広げることにおいて重要な役割を果たした。

プロテスタント宣教師の中国語研究に端を発する民衆への言語教育は、女性、子供、身

分の低い男性など、伝統的な中国の世界観では教育の対象とされなかった民衆に言語教育を実行するものであった。神の言葉と西洋文明を学ばせることによって民衆を救済することを目指していた。

これに対し、盧は、国家の富強のために、民衆への言語教育を考えた。盧は、プロテスタント宣教師の辞書編纂を助け、キリスト教を信仰していたが、年少期には科挙を目指し、伝統的な中国の世界観も持っていた。列強に蚕食されていく中国を再び豊かで強くすることを考え、そのために民衆に西洋文明を学ばせるべきだと考えた。このことは、西洋文明を学ぶに値する人材を育成するとの教育思想につながり、社会の弱者である民衆を教育していくとのプロテスタント宣教師の教育観と異なっていく。

また、中国の言語の問題を、「言」と「文」と認識したことも、その後の中国の言語教育観を規定した。プロテスタント宣教師は話し言葉としての「言」を重視しており、盧もその考えを踏襲し、「切音新字」を提唱した。しかし、伝統的な中国では、「文」が重視される。その後「新字」は漢字に代わるあらたな文字規範として、「字」そのものへの関心が強く向けられることになった。

プロテスタント宣教師にとって、「字」は基本的にローマ字だったが、民衆が使いやすいものであれば、どのような表音文字でもよかった。「字」は、教材や教師、学校など言語教育を総体的なシステムの一部に過ぎないと見ていた。しかし、後に中国人によって民衆への言語教育は、文字教育と理解され、中国語の近代化と文字改革が同一視されていくようになる。

梁は、中国の知識人に理解されやすい「言」と「文」の二項対立の上で、「新字」の重要性を広く訴えた。梁の言説の多くは盧の言説と共通する。だが、盧が、教科教育や専門教育の重要性を考慮し、学校制度、新聞と図書館の関係において、「新字」の必要性を訴えたのに対し、梁の主張は、中国の伝統的教育観において民衆への「文」の教育を強調し、「新字」の必要性を訴えるものだった。梁の民衆に対する言語観は、清末だけでなく、民国期にも引き継がれ、やがて建国期の「文字改革」へとつながっていった。

今後の課題

本研究では、次の点で限界があった。

- 1) 廈門のプロテスタント宣教師の中国語研究と中国の民衆に対する言語教育の検討
- 2) 上海のプロテスタント宣教師を中心に共有された中国の民衆観
- 3) 清末の民衆に共有されていた中国の伝統的な言語教育観
- 4) 1898年以降の中国の知識人の言語教育観
- 5) 民国期における「国語」の射程

まず、Talmage や Macgowan ら、1850年代から布教を行ったプロテスタント宣教師の言語教育の検討が不十分であった。彼らは当初、民衆が読書のできる文明的な存在だとみなしていたが、その後考えを変え、民衆への言語教育を試みる。今後の課題として、この経緯を詳細に研究したい。彼らが普及させた教会ローマ字に関しては、台湾を中心に先行研究の蓄積があるが、布教初期を対象としたものは手薄であり、プロテスタント宣教師の言語教育観に言及した研究も少ない。Talmage や Macgowan らの編纂した辞書、手記などを検討したい。

次に、1870年代以降の上海を中心とするプロテスタント宣教師の中国の民衆観と言語教育観について深く検討することができなかった。このころになると、布教のための拠点各地に作られており、1877年と1890年には、プロテスタント宣教師が上海に集い、中国での布教の課題を話し合っている。言語教育問題を扱うセッションもあったという。また、*The Chinese recorder* などの宣教師向けの新聞でも議論が交わされていた。会合の記録や *The Chinese recorder* を『万国公報』との関係から詳細に検討したい¹¹⁹。

第三に、清末の民衆自身がどのような言語教育観を持っていたかを検討できなかった。プロテスタント宣教師は民衆を言語教育によって救済しようとしたが、民衆の多くは関心を示さなかった。民国期と建国期には、政府や知識人が民衆へ言語教育を推進しようとしたが、やはり民衆は関心を示さず、遅々として進まなかった。民衆は、別の原理を有する言語教育観のもとで行動していた。清末に言語教育をうけた魯迅の『朝花夕拾』、胡適の『四

¹¹⁹ *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China, held at Shanghai, May 10-24, 1877, Shanghai, Presbyterian Mission Press* 及び、*Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China held at Shanghai, May 7-20, 1890, Shanghai : American Presbyterian Mission Press*

十自述』などの回想録から清末の言語教育のあり方を検討したい。

第四に、1898年以降、中国の知識人の言語教育観がどのように変遷していくのかに言及できなかった。戊戌変法の失敗で、1898年梁啓超とともに日本へ亡命した王照は、日本で『官話合声字母』を考案し、1901年に中国で出版する。中国の知識人に共有された、中国の富強のための文字改革という文脈において、日本の仮名文字は、その目的に合致するものであった。王の『官話合声字母』は、民国期の「注音符号」の原型となる。同時に日本の教育者である伊沢修二（1851-1917）の中国語研究にも影響を与えた。今後、王の回想録『小航文存』を検討し、中国を取り巻く国際情勢のもとで、民衆への言語教育観がどのように変遷したのかを研究したい。

最後に、中国における「国語」の史的役割を十分に検討することができなかった。民国期の「国語」は、清末の言語教育観を引き継ぎ、建国期の「文字改革」の基礎となった点で重要である。ただし、清末の言語教育は、プロテスタント宣教師の言語教育の影響を受けており、建国期の言語政策は共産主義思想を実現するためのものであって、「国語」で、中国の言語の近代化をすべて説明できるわけではない。民国期の雑誌『国語月刊』に掲載された黎錦熙、胡適、錢玄同らの言説を通じて、中国の「国語」のもつ言語教育観とその射程を明らかにしたい。

謝辞

本研究は、京都大学大学院人間・研究科共生人間学専攻外国語教育論講座修士課程における研究成果をまとめた修士論文です。多様な学術領域における権威が集まり、独創的な研究を行う本研究科の研究環境なければ、本研究を進めることはできませんでした。これまでご指導を賜った先生方に、心からお礼申し上げます。

指導教官である西山教行先生には、欧州の言語政策、研究課題の設定、研究の進め方や論文の書き方など、多くのことをご指導いただきました。

田地野彰先生には、英語論文の批判的な読み方、外国語教育の様々なアプローチについて教えていただきました。

阿辻哲次先生には、漢字の変遷と、その背景にある中国の文字文化について教えていただきました。

江田憲治先生には、中国の近現代思想と、清末の中国語文献の読み方を教えていただきました。

研究を進めるにあたり、外国語教育論講座と研究室の先輩、院生の皆様にも励まされました。ありがとうございます。

今後はこの成果をより精緻にし、広く世界に発信できるように努力いたします。

参考資料

盧戇章年譜

- 1854年（1歳） 12月18日、福建省同安県古庄村に生まれる。字は雪樵、又の字を雪庵、幼名担。
- 1862年（9歳） 読書を始める。家は農家であり、幼いころに父を失う。6人兄弟の末っ子で、兄は農業に従事し、彼一人が読書をする。
- 1871年（18歳） 科挙試験に参加する。県試に成績上位で合格するが、府試に落第する。落第後、いとこの盧貞趙の家塾で教える。
- 1872年（19歳） 隣村の英埭頭義塾で教える。
- 1873年（20歳） 続けて英埭頭義塾で教える。隣村の双圳頭の王奇賞から、『聖書』についての知識を授けられる。
- 1874年（21歳） シンガポールに渡り、働きながら英語を学ぶ。
- 1878年（25歳） 厦門に戻り、鼓浪嶼日光岩で華人に英語を教え、西洋人に華語を教えて生計を立てる。また英国宣教師馬約翰の『英華字典』の翻訳を手伝う。
- 1892年（39歳） 『一目了然初階』を出版。付近の船工、物売りに教える。
- 1893年（40歳） 普及の為に『一目了然初階』の抄本『新字初階』を出版する。
- 1895年（42歳） 『万国公報』上に「変通推原説」を發表する。
- 1898年（45歳） 7月22日都察院が林韜存の切音字を用いるべきとの上奏文を代奏する。28日皇帝から諭旨が下るが、戊戌変法が失敗し、案件は放置される。
- 1899年（46歳） 日本統治下の台湾に渡り、台湾総督府民政部学務課編纂事務兼国語学校教務嘱託になる。
- 1901年（48歳） 嘱託を解かれる。
- 1905年（52歳） 7年前の皇帝諭旨の履行を求め、12月に北京に赴き、『中国切音字母』を提出する。学部は、諭旨が外務部に命じたものだとし、盧戇章に外務部に行くように命じる。
- 1906年（53歳） 外務部は管轄外を理由に、学部に戻るように命じる。数度のやり取りの後、学部は訳学館に審査を命じる。訳学館は、『中国切音字母』を「不精密で間違いがあり、定本として各省に通行させることはできない」として、書類を返却する。上海で、『北京切音教科書』、『中国字母北京切音合訂』を出版する。

- 1913 年（60 歳） 中華民国教育部が北京で開いた読音統一会に出席する。
- 1915 年（62 歳） 厦門で『中国新字』を出版する。
- 1916 年（63 歳） 「中華新字促進会」を結成し、『新字月刊』を刊行しようと計画する。
- 1920 年（67 歳） 「切音字研究会」を組織し、『注音字母与中華新字比較表』を作成。中華民国教育部読書統一会会長、呉稚暉から、「先生は初めて音字を創った元祖である」との評価を得る。
- 1928 年（75 歳） 12 月 28 日厦門にて逝去。墓碑には、「發明中華新字始祖」と刻まれる。

参考文献

日本語文献（アイウエオ順）

- 阿辻哲次（2013）『漢字の社会史：東洋文明を支えた文字の三千年』吉川弘文館
- 阿部洋（1990）『中国の近代教育の明治日本』福村出版
- アンダーソン ベネディクト著、白石隆、白石さや訳（2007）『定本想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山
- 石崎博志（2014）「正音資料の特質」『日本東洋文化論集』（20）1-30 頁
- 石原道博（1974）「黄遵憲の日本国志と日本雑事詩(上)：清代の日本研究・第三部」『茨城大学人文学部紀要. 文学科論集』（7）51-80 頁
- 大島正二（2011）『中国語の歴史 ことばの変遷・探究の歩み』大修館書店
- 大原信一（1994）『近代中国のことばと文字』東方書店
- 大原信一（1997）『中国の識字運動』東方書店
- 小川環樹、木田章義（1997）『千字文』岩波書店
- オング W.J. 著、桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳（1991）『声の文化と文字の文化』藤原書店
- 恩田重直（2003）「中国福建省の厦門における港湾空間の形成過程に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』（572）201-208 頁
- 何炳棣著、寺田隆信、千種真一訳（1993）『科挙と近世中国社会：立身出世の階』平凡社
- 蒲豊彦（2003）「宣教師、中国人信者と清末華南鄉村社会」『東洋史研究』62（3）567-539 頁
- 蒲豊彦（2004）「清末宣教師の文字改革と標準表記システム」『第四回文字文化圏近代語研究会予稿集』155-156 頁
- 蒲豊彦（2009）「庶民のための書き言葉を求めて—清末から民国へ」森時彦編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所 3-26 頁
- 倉石武四郎（1941）『支那語教育の理論と実際』岩波書店
- 倉石武四郎（1953）『ラテン化新文字による中国語初級教本』岩波書店
- 倉石武四郎（1956）『漢字の運命』岩波新書
- 佐藤尚子、大林正昭編（2002）『日中比較教育史』春風社
- 実藤恵秀（1958）『中国の文字改革』くろしお出版
- シュウォルツ B.I.著、平野健一郎訳（1978）『中国の近代化と知識人：巖復と西洋』東京

大学出版会

沈国威 (2009) 「日本発近代知への接近：梁啓超の場合」『東アジア文化交渉研究』2、217-228

頁

中華人民共和国 (1958) 『中国の文字改革』 外文出版社

中国古典文学大系 (1971) 『清末民国初政治評論集』 平凡社

丁文江、趙豊田編、島田虔次編訳 (2004) 『梁啓超年譜長編』 岩波書店

富平美波 (2003) 「清末切音運動における標準音について」『アジアの歴史と文化』7、75-98

頁

狭間直樹編 (1999) 『共同研究 梁啓超—西洋近代思想受容と明治日本』 みすず書房

平田昌司 (2001) 「制度化される清代官話—科挙制度と中国語史第八」高田時雄編『明清時

代の音韻學』京都大学人文科学研究所 31-59 頁藤井 (宮西) 久美子 (2003) 『近現代中

国における言語政策：文字改革を中心に』三元社

藤井隆 (2008) 「「一盤散沙」の由来：広学会と戊戌変法運動」『現代中国』(82)81-94 頁

西里喜行 (1984) 「王韜と循環日報について」『東洋史研究』43 (3) 508-547 頁

西里喜行 (1991) 「琉球問題と清国ジャーナリズム (資料篇 1)」『琉球大学教育学部紀要 第

一部・第二部』(38) 45-118 頁

松岡榮志 (2010) 『漢字・七つの物語：中国の文字改革 100 年』三省堂

村田雄二郎、C.ラマール編 (2005) 『漢字圏の近代：ことばと国家』東京大学出版会

吉澤誠一郎 (2002) 『天津の近代：清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版

会

吉澤誠一郎 (2003) 『愛国主義の創成：ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店

若杉邦子 (1996) 「資料紹介：『(北京)万国公報』-清末維新派が発行した最初の雑誌」『中国

文学論集』(25)141-149 頁

若杉邦子 (1998) 「戊戌変法運動の草創期における維新派と広学会-維新派が発行した《(北京)万国公報》を中心に」、『東方学』(96)133-148 頁

中国語文献 (拼音順)

白滌洲 (1930) 「紹介国語的急先鋒 (盧贇章)」『国語週刊』8-10 期

陳立中 (1994) 「近代国語運動的急先鋒盧贇章」『文史知識』1994 年 9 期 66-69 頁

大清歴朝實録 (1978) 『大清徳宗景(光緒)皇帝實録』6：自光緒 22 年 5 月上至光緒 25 年 10

月下、新文豐出版

- 丁方豪（1992）「盧贇章在切音字正詞法方面的貢獻—紀念我國切音字運動一百周年」『語文建設』1992年4期29-31頁
- 國務院（1958）「中華人民共和國第一屆全國人民代表大會第五次會議關於漢語拼音方案的決議」『文字改革』1983年第2期21頁
- 胡全章（2011）『清末民初白話報刊研究』中國社會科學出版社
- 胡適編（1935）「建設理論集」趙家璧主編『中國新文藝體系』上海良友圖書印刷公司
- 黃溫良（2005）『晚清的漢字拼音化運動』（修士論文、2012年1月20日參照、『台灣博碩士論文知識加值系統』<http://handle.ncl.edu.tw/11296/ndltd/34220835000069131562>）
- 黃遵憲（1898）『日本國志』浙江書局
- 敬鄉樓叢書（1928）『六齋卑議』
- 孔祥吉（2004）「最早上書倡議拼音文字的林輅存」『百年潮』2004年6期77-80頁
- 雷紹鋒（1993）「論戊戌時期的李堤摩太」『江漢論壇』1993年9期67-71頁
- 李超（2011）「淺論戊戌變法時期的文字改革運動」『黑龍江史志』2011年20期54-64頁
- 黎錦熙（1931）「三十五來之國語運動」『最近三十五年之中國教育』商務印書館
- 黎錦熙（1934）『國語運動史綱』商務印書館、2011年再版、商務印書館
- 李宇明（2003）「清末文字改革家論語言統一」『語言教學與研究』2003年2期1-11頁
- 李宇明（2005）「切音字的內涵與外延」『福建師範大學學報（哲學社會科學版）』2005年3期96-102頁
- 羅常培（1934）『國音字母演進史』商務印書館、1959年『漢語拼音字母演進史』として再版、文字改革出版社
- 馬建忠（1904）『馬氏文通』商務印書館
- 茅海建（2005a）「「公車上書」考證補（一）」『近代史研究』2005年第3期8-50頁
- 茅海建（2005b）「「公車上書」考證補（二）」、『近代史研究』2005年4期93-155頁
- 倪海曙（1948）『中國拼音文字運動史簡編』上海時代書報出版社
- 倪海曙（1959）『清末漢語拼音運動編年史』上海人民出版社
- 歐陽躍峰（2002）「「公車上書」：康梁編造的歷史神話」、『歷史教學』2002年10期61-63頁
- 拼音文字資料叢書（1956）『北京切音教科書』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『傳音快字』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『官話合聲字母』文字改革出版社

- 拼音文字資料叢書（1956）『拼音字譜』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『閩腔快字』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『盛世元音』文字改革出版社
- 拼音文字資料叢書（1956）『一目了然初階』文字改革出版社
- 普通話普及狀況調查項目組（2011）「普通話普及狀況調查分析」『言語文字応用』2011年第3期3-11頁
- 錢玄同（1999）『錢玄同文集』中国人民大学出版社
- 清末民初報刊叢編（1968）『万国公報』華文書局
- 時世平（2013）『救亡・啓蒙・復興—現代性焦慮与清末文字救国論』『南開大學學報（哲学社会科学版）』2013年1期85-94頁
- 王東杰（2009）「从文字變起：中西學戰中的清季切音字運動」『中山大學學報』（社会科学版）2009年第1期第49卷83-94頁
- 王爾敏（1982）「中国近代知識普及化自覺及国語運動」、王爾敏（2002）『近代文化生態及其變遷』百花洲文芸出版社291-338頁
- 吳鳳斌（1986）「厦門的苦力擄掠」『南洋問題』1986年2期53-64頁
- 吳玉章（1958）「關於当前文字改革工作和漢字拼音方案的報告」『語文建設』1958年3期4-10頁
- 吳玉章（1978）『文字改革文集』中国人民大学出版社
- 吳玉章、黎錦熙（1957）「六十年来中国人民創造漢語拼音字母的總結」『語文建設』1958年1期15-16頁
- 吳稚暉（1931）「三十五来之音符運動」『最近三十五年之中国教育』商務印書館
- 新課標小学語文閱讀叢書（2009）『中国神話伝説』二十一世紀出版社
- 許長安（1992a）「語文現代化運動的先驅盧贇章」『語文建設』1992年第11期47-48頁
- 許長安（1992b）「盧贇章对語文現代化的貢獻」『語文建設』1992年第12期19-20頁
- 許長安（2000）「語文現代化先驅 盧贇章」厦門大學出版社
- 許長安、李樂毅編（1992）『閩南白話字』語文出版社
- 葉籟士（1955）「在全国文字改革會議上發言」『語文建設』1983年2期24-26頁
- 趙遐秋、曾慶瑞（1962）「清朝末年的漢字改革和漢字拼音運動—紀念“切音字”運動七十周年（1892 - 1962）」『北京大學學報（人文科学）』1962年06期67-82頁
- 鄭師渠（2001）『万国公報』与中日甲午戰爭『近代史研究』2001年4期173-201頁

中国地方志集成 福建府県輯 (2000) 『民国同安県志』 上海出版社
中国近代期刊彙刊 (1991) 『強学報・時務報』 中華書局
中国近代史資料叢刊 (2000) 『戊戌変法』 上海人民出版社
周恩来 (1958) 『当前文字改革的任務』 『語文建設』 1982 年 1 期 35-40 頁
周光慶、劉璋 (1996) 『漢語與中国新文化啓蒙』 台北東大圖書公司
周有光 (1961) 『漢字改革概論』 文字改革出版社

英語文献 (アルファベット順)

De Francis, John (1950), *Nationalism and Language Reform In China*, Princeton University Press.
Fagg, John Gerardus (1894), *Forty Years in South China: A Biography of the Rev. John Van Nest Talmage*, Board of Publication of the Reformed Church in America
MacGillivray, D (1907), *A century of Protestant missions in China (1807-1907)*, The American Presbyterian Mission Press
Macgowan, John (1883), *English and Chinese Dictionary of The Amoy Dialect*, A.A. Marcal
Macgowan, John (1889), *Christ or Confucius, which? Or, The Story of The Amoy Mission*, London missionary society
Macgowan, John (1907), *Sidelights on Chinese Life*, K. Paul, Trench, Trübner & co., ltd"
Moscovici, Serge (2000), *Social Representations: Explorations in Social Psychology*, Polity
Richard, Lovett (1899), *The history of the London Missionary Society, 1795-1895*, Henry Frowde
Richard, Timothy (1894), "Murray's New Phonetic System of writing Chinese Characters", *The Chinese recorder and missionary journal vol.25 (1894)*, National Taiwan University Press, 2011 [Reprint ed.], pp.389-390
Richard, Timothy (1916), *Forty-Five Years in China*, T. Fisher Unwin ltd
Talmage, John Van Nest (1863), *History and Ecclesiastical Relations of the Churches of the Presbyterial Order at Amoy, China*, Hallenbeck & Thomas, Printers